2008 年度　研究論文

挑戦することの価値

－プロ野球選手という夢の職業への挑戦を例に－

東京大学大学院公共政策学教育部
公共管理コース 2 年
渡部結実（78037）

2008 年 12 月 18 日

＜目次＞

Ⅰ　はじめに 4
Ⅱ　プロスポーツ選手のキャリアに関する先行研究等 6
Ⅲ　問題提起 7
１．挑戦することにはどのような価値があるか ・・・・・・・・・・・・ 7
２．言葉の定義 ・・・・・・・・・・・・ 8
２－１「挑戦」 ・・・・・・・・・・・・ 8
２－２「夢」 ・・・・・・・・・・・・ 8
２－３「目標」 ・・・・・・・・・・・・ 9
Ⅳ　調査 11
１．日本の硬式野球 ・・・・・・・・・・・・ 11
２．ＢＣリーグ ・・・・・・・・・・・・ 11
３．群馬ダイヤモンドペガサス ・・・・・・・・・・・・ 12
４．選手の労働条件 ・・・・・・・・・・・・ 14
５．インタビュー ・・・・・・・・・・・・ 15
５－１　概要 ・・・・・・・・・・・・ 15
５－２　ＮＰＢへの挑戦 ・・・・・・・・・・・17
５－３　野球とは別の道への挑戦 ・・・・・・・・・・・・ 23
５－４　野球を「続ける」という挑戦 ・・・・・・・・・・・・ 25
５－５　挑戦を支える人々 ・・・・・・・・・・・・ 26
Ⅴ　考察 36
１．インタビューから見えてきたこと…挑戦は「いきいき」を生む ・・・・・・・ 36
２．挑戦することに伴う不安 ・・・・・・・・・・・・ 36
２－１　収入の不安定さ ・・・・・・・・・・・・ 36
２－２　不確実さに伴う不安 ・・・・・・・・・・・・ 37
２－３　不安についてのまとめ ・・・・・・・・・・・・ 42
３．挑戦を支える他人の存在 ・・・・・・・・・・・・ 43
３－１　ライバルとしての他人 ・・・・・・・・・・・・ 43
３－２　目標とすべき他人 ・・・・・・・・・・・・ 45
３－３　指導してくれる他人 ・・・・・・・・・・・・ 45
３－４　応援してくれる他人 ・・・・・・・・・・・・ 46
３－５　評価してくれる他人 ・・・・・・・・・・・・ 47
３－６　他人についてのまとめ ・・・・・・・・・・・・ 50

４．「生きがい感」の充足 ・・・・・・・・・・・・ 50
４−１ 「いきいき」の正体 ・・・・・・・・・・・・ 50
４−２ 野球という「生きがい」 ・・・・・・・・・・・・ 51
４−３ 二つの生きがい感 ・・・・・・・・・・・・ 52
４−４ 生きがい感についてのまとめ ・・・・・・・・・・・・ 54
５．挑戦の結果 ・・・・・・・・・・・・ 55
５−１ 夢や目標の実現 ・・・・・・・・・・・・ 55
５−２ 挫折経験とその意味 ・・・・・・・・・・・・ 55
６．一般化の可能性 ・・・・・・・・・・・・ 61
６−１ 「挑戦すること」は特別なことか ・・・・・・・・・・・・ 61
６−２ 挑戦に伴う不安の一般化 ・・・・・・・・・・・・ 62
６−３ 他人とのつながり ・・・・・・・・・・・・ 69
６−４ 生きがい感について ・・・・・・・・・・・・ 70
Ⅵ 留意点 74
Ⅶ 結論「挑戦することには価値がある」 −公共政策から考えた「挑戦」− 78
Ⅷ おわりに 82
インタビューリスト ・・・・・・・・・・・・ 83
参考文献 ・・・・・・・・・・・・ 84
謝辞 ・・・・・・・・・・・・ 87

Ⅰ　はじめに

「あなたは働くということを考えたときに、挑戦を選びますか？安定を選びますか？」

この質問に対して「挑戦です」と皆が答えた、プロ野球選手を目指す若者たちの集団がある。この論文は彼らに対する応援メッセージである。「大丈夫、挑戦することには価値がありますよ。そのように言える理由をこれから述べます」。

「働く」ということに関して、何かテーマを探して研究をしようと考えた。世の中にはたくさんの「働いている人」がいて、「働く」ことに関する問題や議論も満ちあふれている。どれもこれも重要な問題に思えるし、深く学んでみたい気もする。しかし、これというテーマがなかなか定まらない。そこで、テーマを決めてから研究をするのではなく、まずは興味をひかれる働き方を見つけて、そこから何かを考えることにした。

おもしろいテーマ、私自身が強い興味をもてることを探そう。そう考えたときに「野球」が思い浮かんだ。中学生の頃に野球が大好きになり、ある野球チームのファンクラブに入っていたこともある。そこで、野球を仕事にしている人を題材にしてみたらどうだろう、と考えた。しかし、そのときの私の頭にあったプロ野球選手は、「高い年俸をもらうスターたち」というイメージだった。「働く人」として研究の題材にするには、一握りの恵まれている人たちでありすぎるように思えた。

「野球選手だけれど必死にがんばって働いている人」はいないものか、と考え、周りの人に聞いてまわった。すると、独立リーグという、セミプロのような形態の野球リーグが存在することを知った（実際にはれっきとしたプロの野球リーグである）。早速インターネットで調べてみると、日本には複数の独立リーグがあることを知った。それぞれ地域に密着して活動を行っていること、独立リーグに属する選手たちはプロでありながら最終的には我々が「プロ野球」といって普通意味するところのＮＰＢを目指していること、などがわかってきた。いままで知らなかった世界であり、新しい取り組みであるからこそ研究の対象としておもしろいかもしれない、と思った。

その当時二つあった独立リーグのチームのうち、私が選んだのはＢＣリーグ（Baseball Challenge League）群馬ダイヤモンドペガサスだ。少し前までその存在すら知らなかったチーム、もちろん試合を観たこともない。選手の顔と名前も一致しない中、とにかく飛び込んでみようと、ホームページ上の「お問い合わせフォーム」から取材申込をしたところから始まった。初めての土地・群馬、どこから来たともしれないような学生である私を快く受け入れてくれた関係者、球団スタッフと地元のボランティア総出で運営される試合、

私よりも若い選手たち。様々な出会いがあった。

一週間にわたる取材を終え、東京に戻ってきてしばらくは全くテーマが定まらなかった。確実に何かを得てはいるのだが、言葉にできない。選手たちや関係者の姿に感動したのだが、具体的に何が自分の心に触れたのかはわからない。思いつくままに印象に残ったことを羅列してみる。ひたむきにプレーをする若い選手たち、インタビューの途中にもらした将来への不安、そこまで高くはない夢の実現可能性、挫折を味わいながらもあきらめきれない夢、いつかどこかで見切りをつけなければならない自分の能力、それを支える周りの人々。私にうらやましさとどこか悲哀を感じさせるものは何なのだろう。あるとき思い至ったのが、「挑戦すること」の楽しさと苦しさである。

そもそも考えてみれば、リーグ名は「Baseball Challenge」であり、リーグの目標も“only one challenge”、「野球を通じてリーグが目指す地域の活性化、地域への貢献、プロ野球選手を夢見る若者の育成・指導に“Challenge”し続けるという思いが込められて[1]」いる。

「挑戦」、その言葉には希望があるようでいて、困難であるがゆえに失敗に終わる可能性も秘めている。挑戦が成功に終われば生み出される価値は大きい。しかし、挑戦することそれ自体が何かを犠牲にするし、挑戦が失敗したときの代償も大きい。

私が感じたうらやましさや悲哀は、彼らがひたむきに挑戦していたことから感じたものなのではないだろうか。人生において大切なある時期をかけて挑戦するほどのものを見つけ、無我夢中で挑戦する姿はまぶしく、とてもうらやましく感じられた。一方で、挑戦している夢がかなわないかもしれないという恐れや、それでも挑戦し続けてしまう姿に悲哀を感じたのではないか。

もちろん、プロ野球選手になる、というような夢物語のようなものばかりが挑戦ではない。学校を出て企業に就職することも、一か八かの挑戦である。「就職ブルー」という言葉を聞くことがあるが、これは未知の世界に挑戦していくことへの不安から来るものだろう。私たちの世界に挑戦は満ちあふれている。特に若者にとって「働く」ということは今後の長い人生の軸になるものであり、それ自体が挑戦だ。

挑戦、それはその人間にどのような影響を及ぼすのか。「プロ野球選手になる」という、夢物語のような挑戦を続ける若者たちの姿を通じて、挑戦することの価値を考えてみたい。そして、はじめに述べたように、これから考えていくことが、私に感動をもたらしてくれた群馬ダイヤモンドペガサスの選手たちへの応援になれば幸いである。

---

[1] BC リーグホームページ「リーグ紹介」より　http://www.bc-l.jp/bcl/introduce.html

Ⅱ　プロスポーツ選手のキャリアに関する先行研究等

プロスポーツ選手のキャリアに関する研究としては、競技生活からの引退に注目したものに Ebaugh の Role Exit Theory とそれを部分修正した Drahota&Eitzen の研究がある（Drahota, Eitzen (1998)）。

日本におけるプロスポーツ選手のキャリアに関する研究が行われだしたのは比較的最近であるといえる。久保田らは、元プロサッカー選手らへのインタビューをもとに Role Exit Theory を援用したうえで、プロサッカー選手へのキャリアチェンジ支援活動の必要性を指摘している（久保田、野川、末永、重野（2002））。また、三井らは、元プロ野球選手の再就職の困難性を指摘し、現役選手である間に引退後の生活を想定することが重要であるとしている（三井、篠田（2004））。篠田は、現役プロ野球選手と元プロ野球選手双方へのインタビューから、両者の引退後の生活に関する考え方にはギャップがあることを示している（篠田（2007））。鈴村は、アメリカのプロスポーツ界におけるセカンドキャリア支援の取り組みや日本のプロサッカーの J リーグキャリアサポートセンターと比べ、日本のプロ野球界では選手のセカンドキャリア支援が遅れているとしている（鈴村（2008））。

日本労働研究雑誌でも「スポーツと労働」という特集を組んだことがある。その中にはプロ野球選手の労働市場に関する研究（橘木（2005））や、体育会系部活動経験者の企業における処遇についての研究（松繁（2005））をはじめとし、各種スポーツを労働や経済といった分野から分析した研究が集められている。また、ソウルオリンピックメダリストで元シンクロナイズドスイミング選手の田中ウルヴェ京は、自身の体験を元にスポーツ選手のセカンドキャリア教育の重要性を説いている（田中（2005））。

プロ野球独立リーグについては、設立されてから間もないため、研究も少ない。プロスポーツ経営やプロ野球の組織改革等を扱った論文や書籍の中で、近年における新しい取り組みの一例として紹介されている（松岡（2007）、二宮、樋口（2005））。

Ⅲ　問題提起

１．挑戦することにはどのような価値があるか

「挑戦」という言葉のもつイメージはどのようなものだろうか。前向きで達成感があるというようなポジティブなものから、リスクが高い賭けというようなネガティブなものまであるだろう。そして、率直にいって「しんどい」という感じも受ける。

一方、「チャレンジ」と言い換えると親しみやすさが増し、どちらかというとポジティブなイメージがある。日本経済団体連合会が会員企業を対象に行った調査によると、新卒者を採用する際には 49.4％の企業が「チャレンジ精神」を重視すると答えている[2]。有名な通信教育の講座名にもなっている。

挑戦にしてもチャレンジにても、言葉に馴染みはあるものの、自分自身がそのような行動を起こそうとはそこまで積極的には思わない。なぜなら、やはりしんどいからだ。

しかし、本稿では「挑戦」がテーマである。さらにいうならば、「挑戦することには価値がある」というのがメッセージである。

そもそも本稿の出発点は、私が群馬ダイヤモンドペガサスの取材中に感じたうらやましさと悲哀である。私にその感情をもたらしたのが選手たちの真剣な挑戦であったという考えのもと、挑戦することの意味について考えた。そして、達したのが「挑戦することには価値がある」という結論である。他人からすれば危なっかしくて理解しにくくても、本人たちにとっては価値があるし、実はそれは社会に対してもいい影響を及ぼすこともある。

挑戦は様々な不安を伴う一方で、それを上回る生きがい感を生む。挑戦は数多くの他人の存在によって支えられている。結果として、挑戦することによって夢や目標がかなうこともあるし、挫折に終わることもある。しかし、挫折に終わったとしても、挑戦によって得られた自信や他人とのつながりが本人を支える。挫折は貴重な学習であり、そこからまた新たな挑戦を始めることができる。そして、挑戦している人間が発する「いきいきとした感じ」は周りにも伝染する。

以下では、これら挑戦することの価値について、群馬ダイヤモンドペガサスの選手たちを例に考えていく。その後で、多くの人が「しんどい」と感じると思われる挑戦も、実は日常的に行われているものであるという一般化を試みる。さらに、挑戦によって生み出される「いきいきとした感じ」が社会を活性化する可能性について考える。

---

[2] 2007 年度の結果。ちなみに、企業が重視する点の第１位は５年連続で「コミュニケーション能力」。第２位は「協調性」、第３位は「主体性」で、チャレンジ精神は第４位。

2．言葉の定義

2−1「挑戦」

「たたかいをいどむこと」。挑戦という言葉の意味を求めて広辞苑を引くと、きわめてそっけない定義が載っている。人々が「挑戦する」という言葉を使うとき、その意味はもちろん文脈によって変化する。「世界チャンピオンに挑戦する」という場合もあれば「実力よりワンランク上の学校に挑戦する」という場合もある。なんとなく共通したイメージとしては、未知の何かに「たたかいをいどむ」ということであろう。

それでは、そもそも何のためにたたかいをいどむのか。現状では生きていくことが困難である場合などには、その状況を打ち破るために挑戦することはある意味必然的な行為である。しかし、衣食住も足り、安定した生活をおくっていながら、ときにはリスクをおかしてまでも何かに挑戦することの目的はどこにあるのか。

それは、自分にとって価値のある、より高いレベルの欲求を満たすためだといえる。自らの生命を維持していくという生物としての「生きる」営みにおいては、まずは安全・安定が第一である。しかし、人間にはそれ以上のことを求める欲求もあると考えられる。様々な欲求は漫然としていても満たされるものではない。欲求を満たすためには何らかのアクションが必要になる。その欲求が、自分自身や自分を含めた周りの人々にとって、困難を伴っても実現させる価値のあるものであると自分が信じるとき、人はそのためにリスクを覚悟でアクションを起こす。

欲求を満たすまでには大小の障害が存在する。それを取り除いたり、ときには受け止めたりするためにたたかうというアクションが挑戦である。たたかいをいどむ対象は多種多様なものが想像できる。ライバルや社会制度、生きることそれ自体でもありうる。しかし、最終的に何にたたかいをいどむにしても、第一にたたかわなければならないものがある。それは現状に甘んじようとする自分自身である。

「○○に挑戦したい」と思うことは簡単であるが、実際に挑戦という行動を起こすためには自分の現状を乗り越えなければならない。現状というのはそれなりに調和がとれている状態であるから、変えることには勇気がいる。しかし、それをもってなお自分の欲求を満たすため、新たな次元に足を踏み入れようとすることが挑戦の意味だと思う。

そこで、ここでは「自らの現状を越えて、自分にとって価値があるものを得ようと試みること。夢や目標を達成しようと試みること」を挑戦と呼ぶことにする。

2−2「夢」

「①睡眠中にもつ幻覚。②はかない、頼みがたいもののたとえ。夢幻。③空想的な願望。心のまよい。迷夢。④将来実現したい願い。理想」。これも広辞苑による定義である。

本稿には「夢」という言葉がしばしば出てくるが、それは主に④をさす。しかし、他の定義もそれぞれに示唆的である。「夢をかなえたい」と言った場合、それは「将来、〇〇という願いを実現したい」という意味だが、その「〇〇」の実現可能性はそこまで高くないこともある。ただ、人々が夢を語る場合、それはあくまでも主観的なものであるため、実現可能性もその個人の考え方や能力に依存する。幼い頃から野球が得意で常にエースで四番だった少年と、キャッチボールすらうまくできない少年とが、両人とも「プロ野球選手になりたい」と言った場合、その実現可能性には差がある。

しかし、「将来実現したい願い」といっても、「今夜ビールを飲みたい」という願いを夢とは普通いわないであろう。夢という言葉を使う場合には、実現可能性に多少の差はあれ、未来におけるある程度不確実性をもった願望という意味が含まれている。「今夜ビールを飲みたい」と言ったのが、お酒を飲むことが禁じられている文化圏の人間だった場合には、これも一種の夢と呼びうる。

そこで、本稿において「夢」という言葉は、「将来において、実現できるかどうかはわからないが、その個人がぜひ実現したいと願っていること」という意味で用いることにする。

２−３「目標」

夢と並んで用いることが多い言葉に「目標」がある。これも広辞苑を引いてみると「目印。目的を達成するために設けた、めあて。的。」とある。「夢」よりも若干具体的な印象を与える言葉である。

それでも、「自分の夢はプロ野球選手になることです」という表現を使う人間と、「プロ野球選手になることが自分の目標です」という表現を使う人間の両方がいるように、夢と目標という言葉は同じ意味で使われることもある。しかし、「来月までに３㎏やせるのが目標だ」という場合には、目標の代わりに夢という言葉は使わないだろう。また、自分には将来の夢などないという人間にも「次のテストで 100 点をとる」という目標ならある場合もある。

現状から比べれば、目標はより上位のレベルにあり、実現したいと願っているものにはちがいない。次のテストで 100 点をとるという目標にしても、そのために努力して試験勉強をするならば、それはここでいう「挑戦」である。そこで、本稿においても挑戦すべき対象として「夢」と「目標」を並べることとしたい。

「目標」を再度定義するなら「夢と同義に用いることもあるが、個人にとって夢よりもより現実的に感じられる、達成したいことがら」ということになる。

なお、選手たちのインタビュー等においては、ＮＰＢ（意味は後述する）の選手にな

るということが「夢」と語られることも「目標」と語られることもある。これは選手たちのおかれている状況を象徴しているともいえる。つまり、選手たちは幼い頃から「（ＮＰＢの）プロ野球選手になりたい」という「夢」を抱いてきた。そして、いまはプロ野球独立リーグの選手として実際にプレーしているが、これは発展途上の段階である。「夢」だったＮＰＢは、かつてよりも実現可能性を帯びており、目標といえる状態にまでなっているといえる。

届きそうな届かなそうな、夢であり目標であるような、将来の可能性に向かって挑戦を続ける若者たちが本稿の主役である。

Ⅳ　調査

１．日本の硬式野球

日本の野球界においてその頂点に位置するのはＮＰＢ（Nippon Professional Baseball＝日本プロフェッショナル野球組織）である。ＮＰＢはセントラルリーグ、パシフィックリーグの各 6 球団、合計 12 球団から構成されている。「プロ野球」というと通常はこのＮＰＢをさすことがほとんどである。

また、「アマチュア野球」という場合は、社会人野球（日本野球連盟が統括）・大学野球（全日本大学野球連盟が統括）・高校野球（日本高等学校野球連盟が統括）をさす場合が多い。なお、全日本大学野球連盟と日本高等学校野球連盟は日本学生野球協会を構成し、さらに日本学生野球協会と日本野球連盟とが全日本アマチュア野球連盟を構成している。このように、アマチュア野球については組織が段階的かつ複雑であり、全日本アマチュア野球連盟が最上部組織として位置づけられるものの実質的な統括の権限はもたないなど、混乱した状況にある。また、ＮＰＢとアマチュア野球団体との間には歴史的な軋轢が存在するほか、アマチュア野球の中でも所属する連盟が異なると試合ができない場合があるなど、野球界全体として円滑な運営がされているとはいえない。

これまでプロ野球といえば事実上ＮＰＢ所属の 12 球団に限られていたが、ＮＰＢとは一線を画したプロ野球独立リーグとして 2005 年に四国アイランドリーグ（現在の四国・九州アイランドリーグ）が、2007 年に北信越ＢＣリーグ（現在のＢＣリーグ）が設立された。なお、2008 年には関西独立リーグが発足し、2009 年から本格的に始動することが決まっている。

２．ＢＣリーグ

ＢＣリーグは、野球事業を通じた地域活性化・地域貢献を目的とし、2007 年に新潟県・長野県・石川県・富山県にそれぞれ本拠地をもつ「新潟アルビレックス・ベースボール・クラブ」「信濃グランセローズ」「石川ミリオンスターズ」「富山サンダーバーズ」の 4 球団でスタートした。現在は、群馬県から「群馬ダイヤモンドペガサス」が、福井県から「福井ミラクルエレファンツ」が加わり、6 球団でリーグ戦を行っている。

リーグの運営体制としては、運営会社である株式会社ジャパン・ベースボール・マーケティングと六県にある県民球団を運営する球団法人がリーグ加盟契約を結ぶ形態となっている。公式戦は北陸地区（石川・富山・福井）と上信越地区（新潟・長野・群馬）の二地区に分かれて行い、前後期制（前期：4 月～7 月上旬、後期：7 月下旬～9 月）を採用して

いる。10 月にはリーグ優勝を決めるチャンピオンシップが開催される。

各球団は最大で 30 名の選手を抱えることができ、監督・コーチ陣はＮＰＢ出身者を中心に 3 名から編成される。選手と球団法人とはリーグ所定の統一契約を原則一年間の契約期間で締結し、報酬としてシーズン中は月給に加えて活躍に応じた報奨金が支給される。

Challenge というその名に表れているとおり、リーグに関わる全員がそれぞれ「挑戦」をしていくことを組織の理念として掲げている。具体的には、選手はＮＰＢプレーヤーやメジャーリーガーになるためチャレンジをする。監督やコーチはそのような選手の夢をかなえるべく指導し、また自らの指導者としての資質を高めるためにチャレンジをする。リーグ全体としては、野球事業を通じた地域活性化・地域貢献とともに、夢をもった若者の育成・指導にチャレンジする、としている。

四国アイランドリーグではＮＰＢ入りのためのステップを提供することに主眼が置かれているのに対し、ＢＣリーグでは地域活性化も重視しているのに違いがあるといわれる。

リーグがスタートした 2007 年には、石川ミリオンスターズの内村賢介内野手がＮＰＢの育成枠ドラフトで東北楽天イーグルスから一位指名され、ＮＰＢ入りを果たした。二年目の今年はＢＣリーグ全体で 3 名の選手が育成枠ドラフトで指名を受けた。

３．群馬ダイヤモンドペガサス

本研究の調査対象である群馬ダイヤモンドペガサスは、株式会社群馬スポーツマネジメントが運営する群馬県の県民球団である。同社は高崎青年会議所のＯＢが中心になって平成 20 年 1 月に設立された会社で、資本金は 6000 万円、株主には上毛新聞社・群馬テレビ他 33 社及び取締役 4 名が名を連ねる。代表取締役社長の糸井丈之氏をはじめ各取締役は他に自身が経営する会社を有しており、同社に常駐する社員は 3 名となっている。

主催試合になると取締役や社員が総出で運営にあたるが、ボランティアが多くの業務を支えている。ボランティアは随時募集しており、球団運営のサポートということで、球場での受付や観客整理、売店での販売、球団事務所での軽作業などを担当している。試合でアナウンスをするいわゆるうぐいす嬢も一人のボランティアが毎試合担当しており、子供からお年寄りまで多くの野球好きに支えられて運営が成り立っている。

チームはＢＣリーグの規定に則り、開幕時の登録選手 26 名（平成 20 年 10 月 1 日現在では 1 名が怪我で登録抹消され、25 名）・監督 1 名・コーチ 2 名という構成になっている。選手は平成 19 年秋に行われたＢＣリーグ合同入団トライアウトで入団した選手を中心に構成されているが、その約半数である 13 名が群馬県関係者である。地域密着を掲げるＢＣリーグにあっても地元出身者の割合は高いチームである。

選手たちの前歴は直近のものに限ると、表１の通りとなっている。

表１

NPB	1 名
BCリーグ他チーム	2 名
クラブチーム	11 名
社会人野球	1 名
大学野球	5 名
高校野球	5 名
米マイナーリーグ	1 名

クラブチーム出身者については、大学や高校等を卒業した後にアルバイトをしながらクラブチームで野球を続けていた選手やＮＰＢをやめてクラブチームに入った選手など、様々である。

また、年齢構成は表２のとおり、平成 20 年 10 月 1 日現在で平均年齢 23.7 歳の若いチーム構成になっている。

表２

18～20 歳	4 名
21～25 歳	18 名
26～30 歳	3 名
31～35 歳	1 名

次に、指導者に目を向けてみる。監督の秦真司氏は、ヤクルトスワローズの捕手・外野手を務め、日本ハムファイターズ・千葉ロッテマリーンズを経た後、千葉ロッテマリーンズで打撃コーチ、中日ドラゴンズで捕手コーチを経験。その後、群馬ダイヤモンドペガサスの監督に就任した。投手コーチの河野博文氏は日本ハムファイターズ・読売ジャイアンツ・千葉ロッテマリーンズで投手として活躍し、野手コーチの澤井良輔氏は千葉ロッテマリーンズで内野手として活躍していた。このように監督・コーチ陣にはＮＰＢ出身者をそろえている。

本研究の対象としてＢＣリーグの中でも群馬ダイヤモンドペガサスを選んだのは三つの理由による。第一に、群馬は東京から比較的近いということ。第二に、2008 年度に新規加

入したチームであり、手探りの状況の中でどのような取り組みをしているのかに興味をもったということ。第三に、ヤクルトスワローズに在籍していた現役時代の秦監督のファンであったという個人的理由からである。

４．選手の労働条件

選手一人ひとりは個人事業主であり、球団と選手契約（業務請負契約）を結ぶ。ＢＣリーグにはリーグ統一契約があり、それを各球団は使用している。この形態はＮＰＢと同様である。以下、契約の中でも特徴的な部分を挙げる。

・ 契約の目的

契約の目的の項にはまずＢＣリーグの目的が示されている[3]。選手はＢＣリーグの設立趣旨と運営方針を理解した上で定められた規律を遵守し、地域活性化へ積極的に貢献するとともに、日々技能を磨き、ＢＣリーグに所属するプロ野球選手として、自らの有する野球技能による稼働を行うことを誓約している。つまり、選手には質の高いプレーでチームに貢献することと共に地域貢献が求められているのである。契約にこの二つが明記されているのはＢＣリーグの特徴をよく表している。よって、報酬もこの二つの観点から査定されることになる。

・ 報酬

球団は契約期間中におけるシーズン期間（4 月 1 日から同年 10 月 31 日）、選手に報酬を支払う。原則として月給 15 万円だが、報奨金が上限 5 万円の範囲内で支払われる。この報奨金については、球団への野球による貢献と地域への貢献を総合的に判断して査定される。たとえば、勝利した試合においてヒットを打ったら○円、高崎市の市民清掃デーに参加したら×円、といった具合である。

・ キャリアサポーター制度

シーズンオフに選手たちが地元企業で就業する機会を提供するものとして、ＢＣリーグはキャリアサポーター制度を設けているが、契約の中でもこの制度に基づき球団が選手の就業を支援する旨が明記されている。ＢＣリーグではキャリアサポーター制度を、①シーズンオフの生活費を稼ぎながら、②社会経験を積み、③地域交流の場をもつ「一

[3]野球事業を通じた地域活性化、健全な青少年の育成への貢献、及び日本プロフェッショナル野球組織を構成する球団への所属を希望する野球選手に対し、選手が希望球団と契約できるよう育成することであり、かつ一社会人としての教養・知識・マナーを習得する機会を提供し、野球人のみならず社会人として地域社会に貢献できる人材を育成すること

石三鳥」の施策として位置づけている。

なお、個人事業主であるため、選手たちは国民健康保険や国民年金の加入者であり、確定申告等も自分で行わなければならないが、複雑な手続きについては球団の税理士等のサポートがあるという。選手契約に基づく稼働を直接の原因とした怪我等については、障害補償の定めがされている。

５．インタビュー

５−１　概要

平成 20 年 9 月半ばの一週間、群馬ダイヤモンドペガサスの本拠地である群馬県高崎市に滞在し、試合や練習の合間に選手及び監督、コーチ等関係者にインタビューを行った。この時期、群馬ダイヤモンドペガサスは後期の上信越地区優勝を争っており、また夏に雨天延期された試合の振替試合も行われるなど、体力的・精神的に厳しい状況にあった。そのような中でも、話をうかがった方々をはじめどの関係者も温かく対応してくださったことに感銘を受けた。また、顔を合わせると必ず丁寧に大きな声で挨拶をしてくれる選手たちの礼儀正しい姿が印象的だった。

ＢＣリーグに関しては、それに特化した先行研究等も見つけられず東京ではあまり報道もされていなかったため、主にインターネット上での情報収集をして事前調査を行った。選手たちの基本データは一通り把握することができたので、様々な経歴をもつ選手たちがプロ野球選手として活躍することを目指して集まってきているということはわかってはいた。しかし、一人ひとりがどのような方向性をもっているのか、日本の野球界における実力はどの程度のレベルのものなのか、ＮＰＢに入るという目標の実現可能性はどのくらいあるのかといったことについてのイメージがつかなかった。実際に現地に行く前の印象としては、「ＮＰＢに入りたいという夢を追い続ける人たちが集まってきているものの、実現可能性はそれほど高いものではなく（昨年度は 1 名しかＮＰＢ入りできていないのはわかっていた）、将来の保証もない中で大変そうだな」という程度のものであった。

メディアの情報では地元密着の県民球団としての期待や日本野球界の裾野を広げるという意味での期待等華々しい面ばかりが強調されており、実態についてはあまりよくわからなかった。

そのような事前のイメージをもとに、インタビューの際に何を質問しようかと構想を練った。インタビューをしに群馬に行った当初は明確なテーマを設定していなかったが、

プロの野球選手として働く若者たちの実像を知るために設定した質問は以下の三つである。第一に、将来の夢や目標について。第二に、現在のやりがいについて。そして第三に、現在から将来に向かってどのように努力をしていこうと考えているか。野球選手として将来どうなるかわからない不確実な状況の中で、自分自身の夢や目標はどのように設定しそれに向かってどういう努力をしているのか、またプロ野球選手である現状への満足と将来の夢や目標とはどのように折り合いをつけているのかということを知りたいと考えた。

そして、選手たちを含め関係者に聞いてみたいこととして、さらに追加で一つの質問をすることにした。「あなたは働くことにおいて安定か挑戦か、どちらを選びますか」というものだ。ある程度恵まれた環境の中で一歩ずつ夢や目標に向かって挑戦していくことができたら、それがベストだろう。ダイヤモンドペガサスの選手の中にも、以前は企業の正社員として働きながらクラブチームに所属し、野球を続けていた選手たちもいる。ＢＣリーグのチームに所属するということのメリットは、お金をもらいながら野球に専念することができるということと、クラブチームよりはＮＰＢ入りの可能性が高いと思われることである。デメリットは、生活をすることを考えると収入が少ないこと、ＮＰＢ入りの可能性も決して高くはないため将来はどうなるかわからないことである。

メリットとデメリットを比較した場合、安定した状況を捨ててＢＣリーグに入るというのは容易に下せる判断ではない。そのような中であえて未知の世界に飛び込んできた彼らは一体どのような志向をもっているのだろうか。それを確かめる質問が「安定か挑戦か」なのである。安定を望むことと挑戦することとは反する方向性をもつことが多い。しかも、生活を支える「働く」という行為においては、「安定」のほうが優先順位としては高いのが当然であるような気もする。しかし、自分の好きなこと（この場合は野球）を全うし、夢をかなえるためにＢＣリーグという場所を選んだ若者たちはどう考えているのだろう。

インタビューの対象者は表３の通りである。監督・コーチという指導者層については３名全員にインタビューすることができたが、選手については限られたスケジュールであったため、在籍選手 26 名（登録選手 25 名・登録外選手１名）全員にインタビューすることはできなかった。そこで、練習および試合前後に時間的余裕のありそうな選手に声をかけ、応じてくれた場合にインタビューを行った（実際には、声をかけた選手全員がインタビューに応じてくれた）。球団運営関係者については、窓口となってくれた株式会社群馬スポーツマネジメントの加藤裕美氏に紹介をお願いし、インタビューを行った。

表３

選手	９名
指導者層	３名
球団運営関係者	５名

インタビューの内容の中心は、選手たちの現在や将来についてである。実際に話を聞く前には、選手たちは基本的に全員ＮＰＢに入ることを目指しているものと思っていたが、話を聞いてみるとバリエーションがあることがわかった。どのような夢や目標に挑戦していくかによって現在の心情や取り組みも変わってくるため、ここでは挑戦の種類を分けたうえで各選手の姿を追い、その後に選手たちを支える関係者の話を見ていくことにする。

５−２　ＮＰＢへの挑戦

ＢＣリーグの設立趣旨にもうたわれているとおり、多くの選手はＮＰＢを目指している。現在の野球協約によると、ＮＰＢに入るためには、ＮＰＢ所属経験がなく日本国籍とそれに準ずる資格をもつ選手はすべてドラフト会議を経なければならない。つまり、基本的に自分から入団志願はできず、ＮＰＢ球団側からのオファーを待つ必要がある。ＢＣリーグの選手からの挑戦としては、スカウトの目に留まるという道とテスト入団という道があるが、テスト入団できるのは受験者全体で一年に一人程度しかいない。それゆえ、ＮＰＢに入るためには、ＢＣリーグの試合でいい成績を挙げスカウトの目に留まるのが最良の道である。実際に、私が観戦していた試合の対戦相手であった福井ミラクルエレファンツの柳川投手はＮＰＢのスカウトに注目されているという噂があり、その試合にスカウトが観戦しにきていた。後日行われたドラフト会議において、柳川投手は福岡ソフトバンクホークスに指名され、ドラフト育成枠での入団が決まった。

ＢＣリーグの試合で活躍するといっても、何か卓越した部分がないとなかなか目立つことはできない。なぜなら、各選手は高校、大学や社会人、クラブチームと野球経験を積んできており、これまではスカウトの目に留まらなかった選手たちであるからだ。ＢＣリーグ内でいい成績を残すというよりもプロで通用するような成績を残さなければならないのだ。

そのようなポジションにあるＢＣリーグだが、高校からそのままチームに入ってきた選手にとってはそのレベルに追いつくのも大変だという。高校の野球部で主将を務め、

群馬県大会ベスト４まで進んだ経験をもつキャッチャーの廣神聖哉選手[4]は 19 歳。現在のチームにあっては最年少だが、レギュラーシーズン 59 試合に出場し、2 割 7 分の打率を残している。彼の将来の目標はＮＰＢ入りと明確である。よどみない言葉で語られる未来は不安などよりも明るい可能性に満ちているように感じられた。

「ＮＰＢを目指しています。ＮＰＢは給料も環境も違い、日本で野球をやるなら頂点。別にお金や名誉がほしいということではなく、せっかくならいちばん上まで目指したい。頂点を目指すことで現在のやりがいや向上心が生まれると思います」

そのためにはいま何をすべきだと考えているかを聞くと、

「ＮＰＢに入るためにはレベルアップしていく必要がありますが、キャッチャーとして、リードや送球、ホームランを打つ力などはまだまだです。体力もまだ劣っているし、高校時代に使っていた金属バットとは違い、ＢＣリーグで使用されている木のバットではなかなか打てません。そういった自分の弱点を理解しないと鍛えようもない。キャッチャー出身の秦監督をまず抜かないとＮＰＢにはいけないと思っています。監督から吸収できるものは全て吸収するつもりでいます」

という答えが返ってきた。

高校野球とＢＣリーグとではアマチュアとプロの違いがあり、プロ野球チームであるダイヤモンドペガサスでプレーすることのやりがいを聞いてみた。

「高校と比べてレベルが上がり、自分が下にいることに気づきました。だからこそ、レベルを上げていきたいし、やらなければならないと思っています。いまはファンに対するアピールなど考える余裕はなく、自分がやっていくのが精一杯。子供が見て『すごい』と言ってくれればうれしいけれど、とにかく自分が一生懸命プレーすることが大切だと思います。

好きな野球で上を目指していながら他の道に行かざるを得なかった人に比べて、自分は恵まれていると思います。せっかくやりたいことができるから悔いのないようにやりたい。もちろん、だるいと思うこともありますが、怠けてしまっては後から後悔するだけです。努力すれば結果はついてきます。自分は不器用だから失敗したときな

[4] 廣神聖哉（1989.8.19 生）　ポジション：捕手　球歴：前橋育英高校

どにリセットしにくいけれど、できないことこそ、一生懸命やりたい。練習はうそをつかないと信じています」

最後に、「プロ野球選手もひとつの職業ですが、仕事をするにあたって安定と挑戦とどちらを好みますか？」と聞いた。

「今は若いから挑戦していきたい。小さい頃からの夢だったし、NPBに挑戦したいと思います」

という答えだった。

ＮＰＢを目標にしている選手たちはこのチームでのプレーにおいても自分の弱点を自覚し、それを乗り越えなければ先には進めないと考えている。一足飛びに夢がかなうということではなく、日々地道に力をつけていく必要がある。28 試合に登板し 10 セーブをあげている越川昌和選手[5]は安定したコントロールに定評のあるリリーフピッチャーである。

「ＮＰＢを目指しています。いまは基本的な筋トレなどを地道にしていくことが大切だと考えています。一試合ずつアピールしていきたいと思っています」

いまのチームでのやりがいや待遇について話を向けると、

「プレーをしていてどうやってもうまくいかないことばかりだからこそ、前向きにがんばっていけます。自分の目標（ＮＰＢに行くこと）や地域を盛り上げていくという目標もある。収入面などの待遇はいまの自分にはちょうどいいと思っています」

と話してくれた。

青木清隆選手[6]はセカンドを中心に守り、71 試合出場とほぼ全試合に出場している。今年度ＢＣリーグのベストナイン賞（二塁手）に選ばれたが、自分の精神的な弱点を自覚している。

---

[5] 越川昌和（1984.11.29 生）ポジション：投手　球歴：多古高校―上武大学―サウザンリーフ市原

[6] 青木清隆（1985.8.30 生）ポジション：内野　球歴：前橋育英高校―大東文化大学

「将来はＮＰＢに行きたいと思っています。そのためには弱点を克服しないといけません。ネガティブな性格なので、ポジティブに考えるようにしたい。プロとしては、勝っても負けても気持ちの切り替えをうまくしていかなければならないと思います」

また、以前は大学やクラブチームで野球をしていたが、そのときと比べて恵まれた環境であることに言及する。

「以前は社会人として仕事をしながらクラブチームに所属していました。大学を卒業して安定した道を歩むこともできましたが、ここで野球漬けの毎日を送れることをうれしく思っています」

選手たちの月給だけに注目すると待遇は恵まれているようには思えないものの、野球に専念できるということが重要であるようだ。「安定か挑戦か」という質問をすると

「いまは若いので挑戦していきたい。大卒で安定の道を選ぶこともできるにはできましたが、いまの道を選びました」

という答えだった。以前の生活は安定していたが、それよりもＮＰＢに挑戦することの方が本人には重要だった。

また、ＮＰＢに行くという目標への挑戦においても、現在のモチベーションにおいても、周囲の人々の存在の大きさを挙げる選手は多い。キャッチャーの川村修司選手[7]は野球にすべての照準をしぼって日々生活している。

「将来の目標として、最終的には野球の指導者になりたいと思っています。その前にやはりＮＰＢにいきたい。いけるところまでがんばっていきたいと思います。

そのために、いまは全てのことについて野球につなげて考えるようになりました。たとえば、食事をするにも身体に気を遣っていますし、女性とデートするときも『かっこいいところを見せたい』というように野球のモチベーションにつなげています。練習して技術を上げるためには、後輩を含めて他人のアドバイスには全て耳を傾けるようにしています」

[7] 川村修司（1986.11.28 生）ポジション：捕手　球歴：帝京高校—REVENGE99

現在のやりがいについては、

「いまは本当に幸せです。プロとしてお金をもらっているなんて信じられないくらいです。入団する前にはバイトをしながら野球をしていたので、野球に専念できるのが最高。監督やコーチもすごい。プロなのでしっかりしたプレーをするようには心がけていますが、ファンにはありがたいという思いでいっぱいだし、本当に励みになります。自分より周りのため、親やファンのために上に行きたいと思います。他人の存在が 100%原動力ですね」

周囲への感謝をたびたび口にする謙虚な姿勢が目立ったが、「安定か挑戦か」という質問には迷わず「挑戦」と答えてくれた。

また、挑戦に伴う葛藤を打ち明けてくれた選手もいる。投手の小暮尚史選手[8]の目標はやはりＮＰＢに行くことであり、自主練習を重ね努力は惜しまないが、一方で不安も感じている。

「ＮＰＢに行きたいと思っていますが、ピッチャーは人とは何か違ったもの、優れているものがないと上には行けないので、それを探しています。みんな同じような球を投げるから、差をつけないといけないのです。チームにはＮＰＢで活躍した河野コーチがいますが、ＮＰＢを経験したコーチ陣と自分たちの感覚はやはり違います。その差を埋めることがＮＰＢに行くためには必要であり、努力してコーチたちの感覚に近づきたいと思っています」

次に現在のやりがいを聞いた。以前は群馬県内のクラブチームでプレーをしていた小暮選手だが、ダイヤモンドペガサスに入団してプロになり意識が変わったことはあるかと聞いてみた。ちょうどそのとき、球団の根岸ゼネラルマネージャーが封筒を小暮選手に渡しに来た。中を見せてもらうと、500 円分の金券が入っている。

「こんなふうに、勝てば金券をもらえるんですよ。ここでは結果が全てです。高校と違って、ここでは駄目だと落ちていくしかない。それがいい刺激になるし、不安でもあります。でも、不安なときは練習して結果を出すのみ。周りもいちいち自分を気にしてくれないから、精一杯やるだけです。

[8] 小暮尚史（1985.10.11 生）ポジション：投手　球歴：児玉高校―伊勢崎硬建クラブ

野球の世界ではＮＰＢを頂点として、社会人野球が続き、大学野球とＢＣリーグが同じくらい、といった序列だと思います。社会人はその所属している企業の看板など、背負っているものが違いますね。自分としてはプロ入りできたのが奇跡だと思っています。もともと、入団できなかったら野球をやめるつもりでした。クラブチームでやっていても先がないし。でも、入団テストに受かったから野球を続けられるし、上に行きたいと思えます。その一方で、野球選手としては寿命が短いという思いとの葛藤があります」

ＮＰＢに行くのが目標だが、小暮選手はその他の道も視野に入れている。

「将来的にプロ（ＮＰＢ）でやれているのがいちばんですが、駄目だったときは指導者にはなっていないと思います。教えるのは苦手なので。いまは周りから様々な刺激を受けていますが、それを社会人として活かしていきたいですね。がんばりぬいていきたい。野球とは違う道に進んだとしても、自分は挑戦し続けたいと思います。45 歳とかになったら安定を望むかもしれないけど、会社でもいろいろな仕事があり、そういう意味では挑戦していきたい。いまは社会人として通用するように成長できたら、と考えています」

ＮＰＢに行こうとすることだけが挑戦ではない。どんな仕事をしたとしてもそこには大小の挑戦がある。大きな夢に気を取られて忘れがちな視点を、彼の言葉は思い出させてくれたと思う。

しかし、ＮＰＢに行きたいという将来の明確な目標に基づいて日々プレーしている選手ばかりではない。外野手の小田智康選手[9]は特に目標を定めているわけではないという。

「将来のことは特に考えていません。なるようになります。やりがいを感じるのは、お客さんがいること。どんなときでも一生懸命やらなければなりませんから。ファンがいるのはうれしい。当面の目標は優勝することです。以前は、試合に自分が出たいという気持ちが強かったけれど、いまはチームが勝つのが第一。自分で言うのもなんですが、大人になったと思います」

働くとか将来の目標とか、小田選手は堅く考えていない。そのように軽やかな小田選

[9] 小田智康（1983.5.6 生）ポジション：外野　球歴：千葉黎明高校―千葉商科大学―サウザンリーフ市原

手が働くことにおいて重視するのは安定だろうか、挑戦だろうか。案の定、「それは挑戦ですね」という答えが返ってきた。

５－３　野球とは別の道への挑戦

インタビューを始めた当初、選手たちは皆ＮＰＢを目指しているものとばかり思っていたため、それ以外の答えが返ってきたときには正直言って驚いた。しかし、他の道を目指している選手たちの目標はそれなりに明確であり、説得力もあった。

廣神選手や川村選手と同じキャッチャーの藤澤直哉選手[10]に将来の目標を尋ねたところ、次のような答えがはっきりと返ってきた。

「実家の石材店を継ぎます。野球はできるところまでやりたい。もともと大学を交通事故で辞めて戻ってきたのですが、野球が好きで仕方ないのでうれしいです。もちろんＮＰＢ入りできたらいいですが、このチームで修行する時間は必要だと思っています」

野球以外の目標がある中で、日々のモチベーションはどのように維持しているのだろうか。

「他のキャッチャー二人と話をしたり切磋琢磨したりすることですね。ライバルがいることについて、最初は自分ががんばらなきゃと思っていましたが、いまは周りがいての仕事だと思っています。高校のときはそんなこと思いもしなかったんですけど」

最後に現在のやりがいを聞いた。

「アマチュアでは教われなかったようなことを教わることができ、プロのやり方を学べることです。実家を継ぐとはいえ、草野球でも何でも、野球にはずっと関わっていたいと思います」

継ぐべき実家の家業があるということは、他の選手たちとは違い将来が保証されているともいえる。「安定か挑戦か」という質問については「挑戦」という答えが返ってきた。将来進むべき道がある程度わかっているからこそ心の余裕をもって挑戦できることもあ

[10] 藤澤直哉（1986.7.15 生）ポジション：捕手　球歴：高崎経済大学付属高校

るだろうし、挑戦の質にもいろいろあるのではないか、という気がした。

藤澤選手が実家の家業を継ぐというのは周囲ももともと承知している話のようだったが、ＢＣリーグでプレーしているうちに自分の限界を認識し、別の道への挑戦を選んだ選手もいるようだ。ベンチ裏をうろうろしているときに声をかけてくれた小林幸将選手[11]は野球選手としての限界を語ってくれた。

「僕は今年限りで野球をやめて税理士を目指します。実は去年宅地建物取引主任者の資格を取得しました。いずれは起業したいと考えています。来年からは働きながら税理士の勉強をしていきます。一流企業に興味はなく、起業するために機動的に働ける中小企業に就職するつもりです」

今後の進路をしっかりとした口調で説明してくれた小林選手だったが、野球への未練はないのだろうか。

「僕はもともと他の方向に行きかけたのですが、やはり野球がやりたくてこのチームに来ました。これまでも、野球を続けたいという気持ちと働かなければいけないという気持ちと葛藤がありました。でも、いまはもう新たな目標ができたことで本当にすっきりしましたよ。ＢＣリーグは上（ＮＰＢ）を目指すことが目標ですから、１年やっても 4 年やっても上にいけなければ一緒なんです。僕はもう何年も悩んで野球生活に区切りをつけました」

これまでのキャリアとは別の道へ進もうとしている小林選手にも「働くということを考えたとき、安定と挑戦のどちらを選びますか？」という質問をしたところ、

「サラリーマンになるとはいっても、安定した道を選びたいということではありません。将来的に起業するためであり、そういう意味ではこれも挑戦です」

という答えが返ってきた。

24 歳の小林選手が自分の人生にひとつの区切りをつけ、「本当にすっきりしたんです。もう未練はありません」と繰り返す姿は、逆にこれまでどれだけ悩んできたかを表しているような気がした。10 月 21 日に小林選手の自主退団が発表された。

---

[11] 小林幸将（1983.9.30 生）　ポジション：内野　球歴：帝京高校―横浜商科大学―REVENGE99

５−４　野球を「続ける」という挑戦

群馬ダイヤモンドペガサスにはＮＰＢを経験してきた選手が 2 人いる。投手の富岡久貴選手[12]は現在 35 歳、ＮＰＢで通算 13 年間プレーしてきた。これから上を目指す若手選手たちとは意識も目標も当然違う。そして、ＮＰＢをやめた後になおＢＣリーグで野球を続けること自体が、彼にとっては挑戦でもある。

「ゆくゆくは指導者として野球を教えていきたいと考えています。選手としてはいずれ限界がきて引退することになります。指導者になるにあたっては、頭ではわかっていても自分でやってみないとわからないことがあり、いまのうちに実際に身体で覚えていこうとしています。選手でいるうちに感覚を体得して、指導者になったときに役立てたいのです」

防御率･奪三振数･勝利数すべてでＢＣリーグのトップ 10 に入る成績を残しているが、本人は満足していない。

「他の選手と違い、自分はＮＰＢでプロとしてやってきました。このチームには、プロでやりきれなかった先発をやりたいという思いを消化するために来ました。プロでは中継ぎとかしかできなかったから。それと、若い選手の見本としての役割を果たしていきたいと思っています。今季は成績がいいといわれますが、自分としてはまだまだです。このリーグでは、自分はずば抜けた成績を残さないといけないはずであり、もっと高いレベルを目指したいと思います。年齢的なことがあるので、技術が落ちてきたのかもしれないというのは気になりますが」

富岡選手はチームメイトにいい影響を与えたいという思いが強い。先発して勝ち投手になった試合の翌日、練習前に立ち話をした際にもその思いを感じた。チームとしての練習が始まる 1 時間以上前には球場に来て、自主練習を始めていた

「自分はチームの練習前に必ず走りこみをするようにしています。上に行こうとしたら他人よりも努力しなくては駄目。決められたことしかやらないのではなく、他人よりも多くやる人が伸びていく。自分の姿を若い人たちに見てもらって、何かしら学び

[12] 富岡久貴（1973.5.8 生）ポジション：投手　球歴：高崎工業高校―東京ガス―西武ライオンズ―広島東洋カープ―横浜ベイスターズ―東北楽天ゴールデンイーグルス

取ってほしい。本当はみんなもっと切羽詰って努力しなければならないはずだけど、なかなか伝わらないみたい。僕が走っているのを見て、僕より前に球場に来て走るようになった選手もいますけどね」

自ら努力を欠かさず、練習中も積極的に若手を指導する富岡選手の意識は高い。将来は指導者になるという目標をもつとともに、ＢＣリーグという新しい取組みについても何らかの協力をしていきたいという。ＮＰＢをやめた後も挑戦を続ける富岡選手の言葉は非常に印象的だった。35 歳というベテランにもなれば、仕事に求めるものも変わってくるのかと思い、安定と挑戦のどちらを望むかを聞いてみた。しかし、はっきりと「挑戦」だという答えが返ってきた。

「昔は安定を望んでいたこともあります。就職もいいところにできたし。でも、この世界に入ってからは挑戦し続けていますね。いまの年齢では選択肢も狭くなっているから、挑戦を続けるしかないんですよ」

それは、若い頃の可能性に満ちた挑戦とは少し違う。多くのことを試してみたいというのではないし、ましてやぬくぬくと安定していられるような状況にはないのである。この道を選んで後悔しているわけでは決してないが、自分を鼓舞しながら常に前へ前へと進んでいかなければならない厳しさを感じた。

５－５　挑戦を支える人々

日々挑戦を続ける選手たちを支えている人々は、どのように選手たちを見ているのか。そして自分自身の今までとこれからのことをどう考えているのか。選手たちの指導にあたる監督・コーチはそれぞれに役割分担ができており、自分なりのやり方で選手たちをサポートしていた。

秦真司監督の背番号は「88」。「パパ（88 の読み方）＝頑固親父」という意味だそうで、選手たちの父親役になる、との意識でこの背番号を選んだ。「頑固親父のようにいろいろと言ってやらなければならないことがあるわけです」と話すが、選手たちの将来についてどう考えているのかを聞いた。

「ＢＣリーグの理念として地域密着というものがあり、地域に貢献していくことが大切です。そこで日々、『人をどう育てていくか』ということと試合の勝利とふたつを考えています。しかし、まずは育成がありき。それは、チームのためでもあり、選手た

ちが企業や社会で活躍するためでもあります。社会的に自立した人間、リーダーシップの取れる人間になってほしいのです。そのためには、①教育的柱、②学習的柱、③訓練的柱の三本柱を掲げています。

教育的柱とは、スポーツを通じて人間力をつけるということ。『野球ですごい』というよりも、野球を通じてすごい人間になる。ユニフォームを脱いだときに人として役立つようなことを学んでほしいと思います。学習的柱とは、プロである以上それぞれがやるべきことがあり、専門体力をつけ、どのように技術を磨いていくか、野球を知ることが必要。学習能力をつけることで、チームとして組織的にやるときにどうすれば成功するか考えます。そのような力を身につければ、一人ひとりが指導者になったときに群馬全体のレベルが上がっていくことにもなります。訓練的柱とは、基礎体力・専門体力を向上させたうえで試合の反省を活かし、練習で訓練していくことです。

そして、これらを社会貢献につなげていってほしいと思います。人の役に立つために何をすべきか、勉強以外でも学べることはあります。ＮＰＢに行きたいという思いが強ければ野球はうまくなりますが、いまの収入だけで生活するのは無理であり、野球ができるのはスポンサーや地域の人々に支えてもらっているおかげなのです。うまくなればいい、お金をもらえればいい、ということではない。人としてどうやっていくかが重要です。四国アイランドリーグでも多くの人間がＮＰＢには行けていないのが実情です。そこで、企業に入っても重用されるような人間になるために成長することにこそ、このリーグの意義があります。指導者が『うまくなればそれでいい』と考えてしまったらそれで終わり。それよりも個人としての成長を望み、周囲との関係を良好にすることで好循環が生まれます。それこそがグラウンドマネージメントであり、モチベーションを高め、組織力をつけることにつながります」

秦監督は現役引退後に筑波大学大学院体育研究科でコーチング理論を学んでおり、監督というものの役割についてとても熱心に説明してくれた。監督に就任して一年が経とうとしているいま、実際の現場でのやりがいや苦労はどのようなものなのか。

「現在の悩みは、この一年が終わったときにどのように人材の入れ替えをしていくかということです。選手本人がチームを去るという区切りをつけられないなら後押しするしかないのですが。しかし、人間いつ開花するかはわかりませんよね。一年契約で球団が保有する選手数が決まっているというのには限界があります。人件費がかかるから多くの選手を抱えることができないのはわかりますが、もし他の各県にチームがあればその県の出身者を返してあげることもできるのに。このチームは地元出身者が

多いのですが、社会人チームの数が不況のあおりで１／３に減ったのは野球界にとってダメージが大きいと思います。各県に１チーム県民球団ができるようになればいい。ＮＰＢが中心になり、高校野球など全てのレベルを巻き込んだ組織作りをしていくことが必要です。地元の人間を地元で育てることができるようになれば、日本の野球はもっと強くなります。

　また、マネジメントをする人を育てていかなければ駄目で、巨人中心の現在のＮＰＢのように利権に固執したり媚を売ったりするのでは進歩しません。お客さんを喜ばせるために、どうあるべきか考えないといけない。本来の目的を見失っていると思います。ＮＰＢでは勝つことが至上命題で、正義を守っていけていない。人の痛みや思いをわからない人が上に立っては駄目だと思います」

選手たちの育成について、基本的には次のように考える。

「野球には空間能力が必要ですが、それには準備能力や判断力、実行力が基礎となります。一球ごとに判断しなければなりません。たとえ自分が試合に出ていなくてもベンチで学ぶこともできますし、私はそのような力を身につけるプロセスを重視します。結果については仕方ない部分もあります。上達するための方法はたくさんあり、自分に見合ったものを効率的に見つけるのが大切です。このチームでは前期は育成期間として負けを覚悟でみんなを使ってきました。その成果もあって、後期は優勝できる力がついたと思います」

上信越地区において前期は 2 位、後期は優勝と着実に成長しているチームについて手応えを感じる一方、もどかしさもあるようだ。監督は長いＮＰＢでの選手生活の中で、実力のある人間ほど謙虚な姿勢で、見えないところでの努力をしていることを知っている。その目から見ると、ＮＰＢという上のレベルを目指さなければならないＢＣリーグの選手たちにはもっと努力してほしいという思いもあるようだ。

雑談をする中で、次のようなエピソードを教えてくれた。シーズンの途中、選手全員を対象にアンケートをとり、自己評価をさせた。①自分は努力をして結果を出した、②自分は努力をしたが結果を出せなかった、③自分は努力しなかったが結果は出せた、④自分は努力しなかったし結果も出せなかった、という四つの中から一つを選ばせるというものだ。

回答結果を見て監督が驚いたのは、選手たちの自己評価と監督による評価とがかなり異なっていたということだ。もちろん評価の基準は主観的なものであるが、結果につい

てはある程度数字に表れるし、明らかに努力をしている人間が謙遜して「努力しなかった」というのも周囲から見てわかる。しかし、監督から見て努力していない人間が「努力をした」と答えることや、努力していない人間が「努力しなかった」と答えるのは甘えの表れである。そして、このチームにおいては上のレベルに挑戦することに意義があるため、甘えていては意味がないのである。

レベルアップするためにＢＣリーグに入ったのであり、決められたこと以外にどれだけ努力をするかが個人の力を高め、他人との差をつけることにつながる。ＢＣリーグに入ること自体が大きな挑戦であるが、ある一時点で挑戦を選ぶことと、その先も継続的に挑戦を続けることには違いがある。現状への満足や将来への不安に邪魔をされ、挑戦を継続していくことには困難が伴う。そのような持続的な挑戦、具体的には日々の自主練習などの努力が重要でありながら、時にそれが足りていないと感じるのはコーチ陣も同様のようだ。

選手たちと年齢が近く、一緒にグラウンドを駆け回ることの多い澤井良輔コーチも次のように指摘する。

「秦監督や河野コーチは優しいので、自分はあえてがみがみ言うようにしています。ほったらかしたらやらないので。プロ（ＮＰＢ）は自己責任でやらなくてもいいけれど、実際はみんな練習しています。しかし、ここではまだそこまで意識が高まっていない。チームとしての練習以外でも練習したいと一度も相談してこない選手もいますし、そうすると力の差が出てきています。自分自身、もともとオンとオフを割り切るほうでしたが、陰でも練習を続けている一流選手がいて、その姿を見て努力するようになりました」

そして、野球選手として成長するとともに、このチームで社会人としても成長してほしいと望む。

「選手については、一人でも早くプロ（ＮＰＢ）の世界に入れてあげたいと思います。しかし、大切なのは野球だけではありません。ファンや地元企業の方も支えてくれているし、こういう環境はなかなかないものです。野球選手は上下関係など理不尽なことにも耐えてきた人ばかりで、そういった力があればサラリーマンとしても当然やっていけると思っています。野球は人間として成長できる場。しかし、いまの若い人たちは理不尽なこともそんなに経験していないし、弱いと感じる部分はあります。勝ったら元気だけど負けたらすごく落ち込む。プロだったら割りきりが必要。少しずつ変

わってくれればいいと思います」

投手陣の指導をする河野博文コーチも見えないところでの練習の重要性を語る。

「チームとしての練習以外にも自分でやっていく努力が必要であり、そのように意欲をもつことが大切。ＢＣリーグとＮＰＢではやはり歴然とした力の差があります。野球を続けたい人たちがここには来ており、やるべきことはたくさんあるはずですが、言っても直らないことは多いですね。子供たちに教えるのとは違い、これまで自分のスタイルでやってきた大人である選手に教えるのは骨が折れます。選手たちそれぞれに注意点はあり、自分からこちらに聞きにくることが重要。しかし、人によって差があり、それはうまくなりたいという気持ちの差かもしれません。

上達するにも気持ちの部分が大切です。それぞれにプロとしての意識はあると思いますが、さらに上を目指すために考えてやってほしいですね」

監督やコーチが共通して指摘するのは「自分から努力することの大切さ」。プロである以上自律的に技能を高めていかなければならないし、レベルアップを目指すならば他人よりもより多く練習をしなければならない。

一方、監督やコーチとは異なった立場でグラウンドやそれ以外の場面で選手たちを支える人たちがいる。谷口弘典マネージャーは練習や試合の準備からチームの運営全般を担当する。自身ももともとは野球選手であり、アメリカのマイナーリーグでプレーした経験をもつ。谷口マネージャーはＢＣリーグを「夢を追う場所であり、夢をあきらめる場所」と言う。

「ＢＣリーグはＮＰＢや社会人野球、大学野球に行けなかった人たちの集まりです。だからこそ、ＮＰＢに一人でも多く行くことができればいいと願っています。

ここはお金をもらいながら野球に専念できるということで、環境は恵まれています。感謝の気持ちをもちつつ、早くＮＰＢに行くために短いスパンでの目標をたてる必要があります。ここでの野球は長い間やるものではないし、甘い世界ではありません。本当はＮＰＢに行ってからが大変です。ＮＰＢとしても二軍選手をとるわけではなく一軍で使える人をとっていくのですから。個人の考え方によるとは思いますが、このチームはＮＰＢの二軍に勝っただけでは駄目で（ＢＣリーグではＮＰＢの二軍との交流試合も行われている）、一軍の選手と比べてどうなのか、ということを見なければなりません。短いスパンで効率よく指導していくのは監督たちの役割ですし、自分はそ

のための環境づくりをしたり、メンタル面で支えたりできればと思います。
　私自身、アメリカに行ったりここへ来たりしたのも、そのときどきに周りの人から助けてもらったおかげ。選手たちも監督やコーチの指導があるからこそ、才能を開花させることができるのではないでしょうか。
　ただ、実際のところ、みんな自分の中で野球を続ける期間を決めていると思います。ここは夢をあきらめる場所であり、夢を追う場所でもある。限界を迎えた選手には戦力外を通告するしかないが、自分でも気づいていくものです。その先のことまでサポートしていこうというのがＢＣリーグ。ＮＰＢはクビになったらそれまで。ここではサポートしてくれた企業で働き、そのサイクルを定着させることで群馬の人口も（若年労働者が少しでも増えるということで）増えるし、宣伝にもなります。その後のことをフォローするということで、チームにいい選手が入ってきやすくなるし、安心感もあるのではないでしょうか」

　谷口マネージャー自身の夢としては、「ゆくゆくはジュニア育成に携わっていきたい」という。アメリカでは、子供たちは一つのスポーツだけでなく同時に様々なスポーツを体験することで人としての成長の幅を広げているということを学んだ。そのような考えに基づいてジュニア育成に挑戦してみたいそうだ。
　加藤裕美氏はチームの運営会社である株式会社群馬スポーツマネジメントで広報・運営を担当している。高校時代から野球部のマネージャーをしており、選手に負けず劣らず野球好き。平日は事務所で業務を行い、試合のある休日等は球場の本部席で試合のスコアをつけつつインターネットで状況を逐次配信している。休みはほとんどないが、好きなことに携わることができて充実しているということだ。選手たちを陰から支える加藤さんに、彼らの将来に対する期待を聞いた。

「選手たちはＮＰＢ入りを目標にしているととらえています。この球団はプロに行くための通過点であり、各選手目指すところは一緒。ライバルが同じチームにいると個々が切磋琢磨し、高められると思います。一年プレーをすると力の差も出てきますが、ここで終わってはいけないのです。去年はＢＣリーグ 4 チーム中 1 人が育成枠でプロ入りしたのみ、それだけ厳しい世界です。
　また、ここでは社会人としての心構えを身につけることができます。選手たちはオフシーズンに働く機会があり、社会人としての基本姿勢を学びます。プロ野球選手は社会に出ず野球しかしていないため、引退してから普通に働く際に苦労するという話を聞いたことがあります。やはり社会人としてはやりたくないこともやらなければな

らないなど、いろいろなことがありますよね。謙虚な姿勢が大切だと思います。野球だけをやっていたのでは駄目で、ひとりの社会人としての自覚が必要ということ。
　それに、ＢＣリーグのいいところはファンと選手が近くで交流できるところ。ファンやボランティアといった多くの人に支えられているというのをここで学ぶことに意義があります」

選手たちがレベルアップをするために必要なことは、地道な見えない努力である、と語るのは監督やコーチと同様だ。

「選手には地道な努力を続け、多くの人々のサポートがあってこそ自分がいる、という謙虚な姿勢を身に着けてほしいです。たとえば、チームの主軸として期待されている選手についての話ですが、今の彼があるのは居残り練習や休みの日にもジムに行って体力づくりをするなど地道な努力をしたおかげだし、それを表には出さない姿勢がすごいと思います。休日をどう使うかは選手の自由ですが、地道な努力があるからこそ強くなれます。そして、それはファンにも伝わりますよ。プレーにも気持ちが表れますから。バットを振るにも全力で振れば、空振りしてもファンには理解される。プレーの一つひとつに掴む心・逃げていく心があると思います」

選手たちのＮＰＢ入りを応援する加藤さんだが、その一方で、選手生活には限界があるということ、ＢＣリーグは通過点であるということへの認識が強い。

「ＢＣリーグでは 30 歳までが勝負だと思っています。ここは通過点に過ぎず、早く巣立っていってほしいという思いがあります。特に、20 代後半の選手などは一年でも早くＮＰＢにいってほしい。プレッシャーもあると思いますけれど、『年だから』と言いわけをせずがんばってほしい。ＢＣリーグでプレーするのは 3・4 年が限度ではないでしょうか」

加藤さんは選手たちを支えてくれている人たちの存在を強調していた。「たとえばこんな人がいます」といって紹介してくれた人の中に、群馬ダイヤモンドペガサスのホームゲーム（レギュラーシーズンでは 36 試合）全ての試合のアナウンスを担当する（いわゆる「うぐいす嬢」）松本亜希子さんがいる。神宮球場や横浜スタジアムでのアルバイトを経験したこともあるが、現在は地元である群馬のために無償でアナウンスを担当している。松本さんも加藤さんと同じく高校のときに野球部のマネージャーを務めており、大

好きな野球に関われるだけでうれしく、ありがたいという。選手たちと直接の交流はなく、少し距離を置いた立場から選手のことやチームのことについて話してくれた。

「このチームには高校を卒業したばかりで上を目指している若い人もいれば、ここでプレーをして野球をあきらめていく人もいます。ＮＰＢに行く人もいるでしょうし、これからどうなっていくのかはわかりませんよね。いずれにせよ、野球ばっかりやってきた人、会社を辞めて入団した人、これからどの道を進むにしても勇気がいることだと思います。

　私は本当に野球が好きでいまは楽しくやっていますし、子供から年配の方まで野球好きが集まってボランティアをやっています。スタッフが足りないのでボランティアでまかなうなど、プロといってもＢＣリーグは独特です。リーグもチームも発足したばかりで不安定ですが、客足を集めるためにこれから様々な工夫をして盛り上げていってほしいと思います」

　ダイヤモンドペガサスを心から応援している松本さんは、スタッフにも自然な心配りをしていた。私も手作りのお菓子をご相伴にあずかったり、試合の帰りに車で送っていただいたりした。

　株式会社群馬スポーツマネジメント取締役の根岸誠氏はゼネラルマネージャーとしてチームのマネジメントに携わる。選手たちの評価も行っており、オフシーズンの過ごし方も含めて労働条件全般について話を聞いた。

「オフシーズンの過ごし方についてですが、オフとはいえ、野球で上を目指すのが目標なので当然トレーニングはやります。その一方で地元の企業で生活費を稼いでもらいます。どの企業に行くかはいまのところ未定ですが[13]、他球団の例を見ていると一般消費者と触れ合う職種が多いようです。スーパーや居酒屋など。コマーシャルを出せる企業では選手を起用することもあるようです。

　また、11 月からも野球教室（監督やコーチ、選手が少年野球の指導をする）はあるので、その場に送り出してくれるような会社に行くことになると思いますね。スーパーや店舗での販売、配送、積荷などになるかな。年末年始の人手が足りないときにまとめて勤務すればあとは自由でいい、と言ってくれる企業もあります」

---

13 実際にオフシーズンに入った現在は、スーパーやバッティングセンター等で勤務している。

次の年も選手契約を結ぶか否かを判断する立場として、選手たちの引退やその後の身の処し方についてどのように考えているのかを聞いた。

「選手生活が終わるときには、必要のある人と話し合いをもつことになります。選手のほうから言い出してくるかもしれませんが。引退後は、株主やスポンサーなどの中には選手をほしいといってくれる企業も結構あります。

チームから出て行く際にもこちらは面倒をみますよ。ゆくゆくは地元の企業に就職し、OB として活躍してもらえればいいと思います。企業の中には団塊の世代が退職をした後、いい人物をとりたいと思っているところもあります。選手たちをいずれ社員として採用するのが目的でスポンサーになってくれている企業もあるんです。広告というよりも採用活動として積極的であり、全員とってもいいと言ってくれている企業もあります。趣味として野球を続けながらでも就職をしてくれればいいと思います。

地元ではそれなりの優良企業が株主やスポンサーになってくれています。このようにセカンドキャリアについてもサポートしていくので、県内出身者のみならず県外出身者にもぜひ群馬に残ってほしいと思います」

選手たちには多くのことを期待している。

「ぜひＮＰＢに行ってほしい。ひとつ上のステージに行って、長く野球をやってほしい。それに加え、地域貢献もしてほしい。ＮＰＢに行けるのは限られているでしょうが、プロとして学んだ方法や野球への考え方を地域の子供たちに伝え、群馬の底上げをしてもらいたいと思います。自分はそのための環境づくりができればいいと考えています」

お話を聞いた以外にも多くの人々が選手たちの挑戦を支えている。球場の売店でお弁当を売っていたのはボランティアスタッフのお年寄りと小学生の男の子だったし、球場前でグッズを販売しているのも地元のみなさんだ。選手やスタンドの観客が怪我をしたときのための医療スタッフも、地域の看護士さんが持ち回りでアルバイトとして待機している。試合中に活躍するボールボーイは、球団が主催する野球教室に参加する小学生や地元の中学生が担当する。試合を応援しにくるファンも老若男女様々で、近所の少年野球チームはおそろいのユニフォームを着て声援を送っている。

それに選手や監督、コーチも応えている。グラウンドとスタンドの距離が近く、試合前には選手と子供たちが談笑する光景が見られる。試合後は勝っても負けてもチーム全

員が球場前に勢揃いし、サインや握手といったファンの求めに応じている。ファンとの直接の交流は、挑戦を続ける選手たちにとって大きな励みになるだろう。

今年度群馬ダイヤモンドペガサスが主催したゲーム 36 試合の 1 試合あたり平均入場者数は 1637 人。県民球団には多くの可能性があり、さらに人気を拡大させていくことが望まれている。ＮＰＢを目指すという選手たちの挑戦もこれから続いていくが、野球を通じて地域を活性化するというＢＣリーグの挑戦もまだまだ始まったばかりである。

Ⅴ　考察

１．インタビューから見えてきたこと…挑戦は「いきいき」を生む

私がインタビューをしたＢＣリーグの選手たちの多くは、ＮＰＢプレーヤーになるという夢をもって日々努力している。ＮＰＢプレーヤーになるという夢が実現するかどうかはわからない。だから、彼らは不安の中にいる。そして、野球選手としての生活に区切りをつけ、新たな夢や目標に向かおうとしている選手もいる。しかし、選手一人ひとりがどのような夢や目標をもっていようとも、彼らの周りには彼らを支える多くの人々がいる。そのような中で日々野球をするということは、多くの選手にとって未来への努力であると同時に、すべての選手にとって現在の喜びでもある。

群馬ダイヤモンドペガサスでは、選手のみならず関係者皆がいきいきとしていた。そして、そこでは文字通り挑戦がすべての基本にあった。挑戦することは、本人にとっての生きがいを生む。一方で、挑戦には不安もつきものだ。しかし、周りにいる人々とのつながりが挑戦を支えてくれる。そして、生きがいをもった人々が集まれれば、その場全体がいきいきとする。私が見たのは、挑戦する人々によって生み出された「いきいき」のサイクルだったのだ。

ここからは、挑戦することによって生み出されるこれらの価値について考えていく。

２．挑戦することに伴う不安

選手や関係者へのインタビューやその他の調査を通じて感じたことは、挑戦には不安がつきものだということである。しかし、それでもなお挑戦している姿は輝いて見え、うらやましいような気持ちにさせられた。挑戦にはどのような不安がつきものであるのか、そして不安は挑戦にとってどのような意味をもつのか。

２−１　収入の不安定さ

ＢＣリーグの選手たちは、その選手契約に定めがあるとおり、4月から10月まで15万円の月給と多少の報奨金が支払われる。チームには選手用の寮がないことから、本拠地近くに自宅がある場合は自宅から通勤し、そうでない場合には自ら部屋を借りなければならない。住宅手当等があるわけではないので、毎月の生活費は決して楽ではない。

また、オフシーズンの生活手段についてはキャリアサポーター制度により確保されるが、働く先については当初から確定しているわけではなく、当然どの程度の賃金が支払われるのかといったことに対して予想はできない。平均年齢が23.7歳（群馬ダイヤモンド

ペガサスにおける平成20年10月1日時点のもの）で未婚の選手がほとんどとはいえ、生活は楽ではない。

同年代の労働者がもらっている毎月の賃金は、「平成19年賃金構造基本統計調査」によると、20～24歳という年齢層において大学卒では2,173,000円、高専・短大卒では1,932,000円、高校卒では1,976,000円となっている。月給ベースで考えると、選手たちがもらっている額はおそらく同年代の労働者と比べて若干少ない。特に、一般企業に一度就職してからＢＣリーグに入った選手にとっては給料が減ったという感覚があるだろう。

そもそも、働くという行為において、収入の占める意味は大きい。「平成20年版労働経済の分析」によると、働くことの目的について「お金を得るために働く」という回答が20代でも57％で第一位である（第二位は「自分の才能や能力を発揮するために働く」で17.7％）。若い人たちにとっても、働くことにおいて収入は重要な要素であることがわかる。

しかし、同じような職種や業種で比べた場合には、収入の多寡が職業選択に影響することは容易に想像できるが、自らの夢がかかっていた場合にはどうであろうか。それはインタビューに答えてくれた選手たちの姿からもわかるように、収入等の労働条件よりも、夢を追って野球に打ち込むことができるという喜びの方を選択することもおおいにありうる。

ただ、ここでひとつの可能性として考えられることがある。これまでずっと野球に打ち込んできてＮＰＢの選手を目指すという夢をもった若者は、ＢＣリーグに入る際に「プロとして野球をする」、つまり野球選手という「職業」を選択するという意識を強くもたないかもしれない、ということである。そうだとすると、職業として収入を重視するという考えは陰をひそめ、好きな野球に専念することができるという喜びの方が先に立つのは当然であろう。つまり、収入とやりたいことを天秤にかけて比較するという意識はもたない可能性があるということである。

しかし、結果論であるが、少ない収入でもやりたいことを選んだ後において、満足感がもてればその職業選択は成功だったともいえる。選手たちへのインタビューでは、月に 15 万円そこそこの収入について、不満やそのことによる生活への不安を抱いている様子は見受けられなかった。それよりも、やりたい野球に専念できお金までもらえてありがたい、というような声が多かった。現状においても、安定を欲するよりも挑戦し続けることを選ぶ攻めの姿勢がうかがわれた。

２－２　不確実さに伴う不安

経済的な見通しが立たないということについては前項で若干述べた。ここでは、それ

とも重なる部分があるが、「不確実さ」について考える。

ＢＣリーグの選手たちにとっての不確実さは大きく分けて三つある。①目標としていること（ここではＮＰＢに入るということ）が達成できるかどうか不確実であるという意味。②野球選手としての寿命がいつまでもつか不確実であるという意味。③野球をやめた後にどのような将来が待っているのか不確実であるという意味。それぞれまったく別のものではなく、相互に関連しているが、これらのもつ意味について検討する。

①目標達成の不確実性

第一に、ＮＰＢ入りという、そもそもの夢であり目標が達成できるかどうか不確実である、というのはわかりやすいであろう。それはむしろ、実現可能性としては低いものかもしれない。これまでＢＣリーグからＮＰＢ入りできた選手は二年間で4名のみ。そのような現実の中で、ひたすら夢をもち続け自分と自分の将来を信じる、というのはときに苦しいことである。

「やるしかない。やれば結果はついてくる」という言葉が、非常に印象に残っている。インタビューの中で選手や関係者が繰り返し口にしていた言葉だ。自分自身に言い聞かせることで不安を払拭し、成功を信じようとしているのだろうか。

キャリアの構築に関連して、今野浩一郎は、自分の将来に対して「どうにかなるさ」と構えている人が好きで、これがキャリアを考えるうえで重要なことではないか、と指摘する（今野（2007））。「好き」というのがある意味ポイントだと思う。その人から、将来に対してポジティブな好ましい雰囲気を感じ取っているのだろう。「どうにかなるさ」が重要である理由について、今野は以下のように述べる。「『将来はこうしたい』と思っても、それを簡単に、あるいはすぐに実現できないのは当たり前であるし、そこに至る道筋を読みきれないことも当たり前である。そんなことにイライラしても何の解決にもならない。それより『どうにかなるさ』と構えていたほうが、与えられた条件の中で、今できることをやっておこうという気持ちの余裕もでるし、それが『あいつもやるな』と周りに思わせる早道であるようにも思う（今野（2007）p62-63）」。

将来が不確実であることは動かしがたい現実である。しかし、それに対する自分自身の考え方を変えることはできる。「不安だ」と繰り返すよりも、「どうにかなるさ」と開き直り、「いまやれることをやるだけ」と目の前のことに集中する。そのことで、不安や恐れを忘れることができる。それが前向きな姿勢にもつながる。そして、そのように努力することで、実は夢や目標の実現に一歩近づいていることにもなる。

夢や目標があってどうしても達成したいと思うなら、実現可能性云々と言う前に行動してみる。選手たちはそれを体現しているのかもしれない。

②契約更新の不確実性

ＢＣリーグにおいて選手契約は一年契約であり、次の年も契約が結ばれるかどうかは成績しだいということになる。ＮＰＢでは、ある年に不調であったとしても復活の見込みがあれば翌年契約する価値もあり、またそれだけの財政的な余裕が球団側にある。しかし、ＢＣリーグにおいては事情が異なる。秦監督が指摘するように、球団が保有することのできる選手数が30人までと若干名に限られているうえ、入れ替えの必要性もあるし、不調の選手を抱え続けるほどの財政的余裕はない。なにせ、選手たちはオフシーズンの生活費を自分たちで稼がなければならないほどだ。

また、一時的な不調ではなく、体力や技術、精神力の衰えに伴い、選手生命の終焉は必ずやってくる。スポーツ選手は若いうちにそのピークを迎えることになる。ＮＰＢの選手たちの平均引退年齢は29歳だという。ＢＣリーグの選手たちにとっては、ＮＰＢに行けるかどうかということに加え、自分の選手生命がいつまでもつのか、ということは常に直面している不安である。たとえば、インタビュー当時22歳という若さの小暮選手でさえ、選手としての寿命に対する不安を口にしていた。22歳とは、大学を卒業したての社会人一年目のサラリーマンの年齢であり、まさにキャリアの始まりというときである。

実際のところ、翌年も契約するかどうかについて、球団側から一方的に更新しない旨を通告するということはあまり想定されていない。秦監督や谷口マネージャー、根岸ゼネラルマネージャーの話を聞いても、選手の側でも自分自身が翌年もプレーを継続できるかどうかは考えており、辞めるべきかどうか迷っている場合には球団側が背中を押す、という考えであることがわかる。

そこで、選手たちにとっては契約更新できるかどうかは、自分自身のコンディションや諸々の条件をどのように冷静に判断できるかどうかにかかってくる。自分の挑戦に見切りをつけるのはつらいことだ。しかし、終わりは確実にやってくるし、その時期を見誤ると次のキャリアにスムーズに移行することができなくなる。

デイヴィッド・Ｅ・ベルは、ハーバード・ビジネススクールの学生へのメッセージの中で「キャリア形成において重要な戦略」について述べている（ベル（2004）幾島訳)。「自分がどんな見返りを求めるかという点から仕事を選ぶこと」、「成功の意味をあまり狭くしないこと」、「長期的な展望をもつこと」が基本的な三つの戦略であるとするが、その際に何より大事な心得が「バランス感覚を失わないということ」だという。リスクを冒して目標に挑戦することはいいことだが、見込みのない勝負を続けても人生の貴重な時間を無駄にすることにつながりかねない。そこで、学生たちに具体的なアドバイスをす

る。それは「キャリアを通じて思い切ってリスクを負う覚悟を決めたうえで、結果がでるのをどのくらい待つか、具体的な年数を決めておく、ということだ。そして、その期間が過ぎたらきっぱりあきらめる。ある年齢に達したとき、いくつものリスクを冒して自分の夢を目指してきたにもかかわらず、まだそれを達成できていなかったら、潔く身を引くことだ。目標のことは忘れて、ゴルフ場へ出かけよう。そして二度と後ろを振り返らないことだ（ベル（2004）p103-104）」。

自分がまだ挑戦を続けることができるという自信がある間は、とにかくたたかいをいどんでいく。しかし、見切りをつけなければならないとなったら、潔く次のステップを考える。そして、その際自分の中でのリミットを設けておくことが大切だ。そのような態度で夢や目標に向かって挑戦をしていくとして、問題になるのは、次のステップにいかに移行していくかということだ。ＢＣリーグの選手たちにとっては、野球から離れた後のことの不確実性、という問題になる。

③野球から離れた後のことの不確実性

選手たちは幼いころから野球に打ち込み、学校教育を受けている過程でもまずは部活動を第一に考えてきたというケースが多い。ＮＰＢ入りという夢をもっているが、野球選手としての生活が終わった後のことはなかなか考えにくい。②で見てきたことと同様、いずれは直面する問題だ。オフシーズンについてはキャリアサポーター制度が設けられており、そこで日々の生活費を稼ぐのと同時に、社会人としてのトレーニングも積む意味がある。

しかし、野球選手をやめた後の具体的なイメージをもっている選手は多くない。選手たちへのインタビューによると、ゆくゆくは指導者の道を進みたいといった希望や一般企業に就職することを考えているといった話があったが、目下の目標はＮＰＢ入りである。とはいえ、スポーツ選手の宿命として現役でいられる時間はそう長くはないということは皆が認識しており、漠然とした不安はもち合わせている。

これは選手たちが目指しているＮＰＢでも事情は同じだ。前述のようにＮＰＢにおいては 29 歳というのが引退時の平均年齢だという[14]。ＮＰＢの選手たちのセカンドキャリアに関する研究はいくつかあるが（三井、篠田（2004)、篠田（2007）など)、そこでは選手たちのもつ将来への不安が浮き彫りにされている。

日本野球機構は、2007 年に現役ＮＰＢ選手 283 人を対象にセカンドキャリアに関するアンケートを行った。結果は表４の通りである。

[14] 「アスリートプラス」JOC セカンドキャリアプロジェクト HP
http://www.joc-athlete.jp/interview/071128.html

表４　（%）

	全体	18〜22 歳	23〜26 歳	27〜29 歳	30〜37 歳
①自分が現役を退いた後の人生のことを意識したことがありますか？	74.6	52.9	78.7	92.3	100
②現役後の人生目標を明確にもっていますか？	14.4	16.5	12.1	13.7	23.5
③現役後の生活設計を具体的に描いていますか？	16.3	14	11.3	19.6	17.6
④現役引退後の生活に不安を感じていますか？	75.8	67.4	79.4	82.7	70.6

㈳日本野球機構が行ったアンケートをもとに作成[15]

興味深いのは、設問の③と④において、引退時の平均年齢 29 歳を含む 27〜29 歳という階層で YES と回答する割合がいちばん高くなっていることである。様々な解釈が可能であるが、30〜37 歳という階層に属する選手たちはベテラン層であり、その年齢までＮＰＢに在籍しているということはキャリアを積んだ一流選手である可能性が高い。そのような選手には引退後も指導者や評論家といった道がある程度用意されているといってもよく、引退後の進路についてそこまで不安はないと考えられる。しかし、プロ野球選手としてもう若いとはいえず、一方で引退後の生活が保証されるようなキャリアも積んでいない 27〜29 歳くらいの選手にとっては、引退というのは現実的でありながら、その後の生活をイメージすることはできないという不安を抱かせるものになっていると考えられる。

そのような特徴はあるものの、全体的に野球選手は引退にまつわることに不安をもちつつも、その後の生活は漠然としか意識できないという状況がうかがわれる。

このような状況を改善するため、ＮＰＢには 2007 年度から「ＮＰＢセカンドキャリアサポート制度」が設けられた。引退後も野球にかかわる仕事に就くことを望む選手が多いが、正式な球団職員などとして雇用される機会は少なく、多くは契約社員といった暫定的な形態である。そこで、様々な企業を訪ねては連携の可能性を探り、人材紹介業の資格を取得したうえで大手人材紹介会社の協力の下で体制を整えているという。

前出の日本野球機構が行ったアンケートによると、引退後に備えて何らかの行動をと

15 http://www.fgn.jp/mpac/sample/__datas__/impacter/200802_05.html

っている選手は38%であり、具体的には貯蓄・人脈形成・進学準備等の勉強・資格取得が挙げられている。一方、何も備えていない選手のうち「引退前後の進路相談、カウンセリング等は必要である」にYESと答えた割合は91.5%、「引退後の求人情報等の就労支援は必要である」にYESと答えた割合は93.9%となっており、何らかの助けを求めている姿が浮かんでくる。セカンドキャリアサポート制度には65.6%の選手が期待しており、期待する内容としては「資格・語学取得講座」（39.3%）、「インターンシップ」（18.6%）、「OBによる講演会」（18.6%）等となっている。

ＢＣリーグにおいては、まだこのような制度は設けられていないが、オフシーズンにおけるキャリアサポーター制度と同様に地元企業への就職をサポートすることになるだろう。根岸ゼネラルマネージャーも再就職の「面倒をみる」と話していた。また、特にこれまで就業経験のない選手にとっては、オフシーズンのキャリアサポーター制度によって、一般企業での経験を積むことも引退後の生活には役に立つことになるだろう。野球以外のフィールドで働くにはどういった知識や能力が要求されるのかを知るきっかけになる。野球での挑戦を続けていく中で引退後の生活に不安を覚えたとしても、自分が身につけるべきものが何かを知っていれば、必要以上に迷わなくてすむだろう。

これらのことは地元密着型球団を目指し、地元企業がスポンサーや株主となっているＢＣリーグの利点である。ＢＣリーグの選手たちにとって、就職先がないという不安や野球以外に通用するスキルがないという不安はある程度緩和されるため、むしろ選手生活を終えた後にどのようなモチベーションをもつことができるかが課題となる。このことについては、「５．挑戦の結果」の項であらためて検討する。

２−３　不安についてのまとめ

ＢＣリーグの選手たちの挑戦には不安がつきものである。将来は不確実だ。夢や目標がかなうかどうかもわからない。挑戦の途上で力尽きてしまうかもしれない。たとえ夢や目標がかなったとしても、その後どうなるのかまではわからない。しかも、収入は不安定だ。それでは、挑戦もせずにあきらめるか。夢や目標をあきらめられないから、挑戦しているのである。結局、不安からは逃れたくても逃れられない。

しかし、不安とうまく付き合うことはできる。それは、第一に、自分と自分の可能性を信じ、いまやれることをやるだけ、と目の前のことに打ち込むこと。これは、不安を認めながらも挑戦の価値を信じ、努力することで夢や目標の実現に近づくことにつながる。第二に、挑戦にも自分の能力自体にも限界があることを認め、見切りをつけるタイミングを考えておくこと。第三に、いまの挑戦が終わった後のことを少しずつイメージしておくこと。挑戦のリミットを設定し、その後のことも少し考えておけば、いまとい

う瞬間の挑戦に思う存分打ち込むことができると思う。

このように考えてみると、現に存在する不安は、人を惑わし苦しめる敵のようにも感じられるが、受け止め方によっては地に足をつけて挑戦していくための味方にもなりうる。不安があるからこそ私たちは努力するだろうし、不安があるからこそ冷静に自分を見つめ、そして将来のことを真剣に考える。もちろん、人の生活の根源に関わるようなどうしようもない不安といったものもあるだろう。ただ、何らかの夢や目標があるとき、それに向かってどうしても挑戦したいと思うとき、そこに不安があったとしても恐れていてはもったいない、という気がするのだ。なぜなら、不安というものは、付き合い方によっては味方にもなるのだから。

３．挑戦を支える他人の存在

前項では、不安が挑戦をする人間の味方にもなる、と述べた。それでは、不安すらも味方にして、たった独りでどんどん前へ進んでいくことのできる人間がどれくらい存在するだろうか。

人間が生きていくこと自体に他人の存在は欠かせないといえるが、挑戦という行為において、それが本質的に孤独な営みであるからこそ、他人の存在の必要性が際立ってくる。人々の夢や目標とはごく個人的なものであり、よってそれに向かっての挑戦も自分独りのたたかいとなる。もちろんチーム等での取り組みもあるが、それでもそれにどのようにコミットするかは個人の問題であり、やはり自律的な行動になる。しかし、挑戦それ自体は自律的で個人的な行動であっても、そこには他人の関与がないと挑戦はうまくいかないし、続かない。

夢や目標に向かって挑戦するとき、応援してくれる人、指導してくれる人、評価してくれる人、目標とすべき人、切磋琢磨する相手、など他人が果たす役割は数知れない。一人の人間が往々にして複数の役割をもっている。それぞれを分けて検討することは難しいが、ダイヤモンドペガサスの選手たちを取り巻く人々について考えることで、挑戦をする人間に他人がどのように関わってくるのかを浮き彫りにしたい。

３−１　ライバルとしての他人

ダイヤモンドペガサスの選手の周りには、まずチーム内に同じポジションを争う選手がおり、ＢＣリーグ全体でも多くのライバルがいる。ＮＰＢ入りを果たすためには、チームにおいて、リーグ全体において好成績をあげて目立たなければならない。チームメイトは共に挑戦をする仲間ではあるが、競争をする相手でもある。それは、独りで挑戦

することの孤独感をあおるのではないかとも思える。仲間とひとつのポジションを争うという感覚はどのようなものなのか想像ができなかったため、何名かの選手に聞いてみた。しかし、実際は、私の中のネガティブなイメージとは若干異なっているようだ。

キャッチャーの藤澤選手は、以前は自分ががんばらなければと気負っていた部分があったが、いまは他の二人のキャッチャーと切磋琢磨することの重要性を感じていると言った。外野手の小田選手は、はじめのうち自分が前面に出ていくことばかりを考えていた。だが、チームメイトと長い時間を過ごすうちに「自分が」という意識よりも、チームの勝利を願う気持ちの方が強くなった。これは、もともと自己中心的だった挑戦の世界が仲間によって広がりを見せたということだと思う。また、キャッチャーの廣神選手は、チームメイトのレベルの高さを実感することで自分の能力の足りなさを知り、レベルアップの必要性を感じていた。澤井コーチも、ＮＰＢ時代に同じポジションを争っていたベテラン選手の努力を欠かさない姿を見て、自らも努力するようになったと語っている。これは、他人の存在によって自分を相対化することができ、さらなる挑戦の必要性を知ったということである。

ここでは、ライバルの存在は孤独感を増す有害なものではなく、むしろ連帯感を生むものであることがわかる。そして、自分の能力を向上させていくためには必要な「他人」であるともいえる。

個人事業主等が独りで仕事をしていく際にこそ、実は同業者仲間との結びつきが大切になってくる、という指摘もある。

組織の一員としてではなく独りで仕事をするという形態は「フリーエージェント」といわれる。球団と個人事業主として選手契約を結んでいるＢＣリーグの選手たちは、まさにフリーエージェントとして働いているといえる（日本のプロ野球では、フリーエージェントという言葉は一定要件を満たしチーム移籍の自由権を獲得したときに使われる)。アメリカではフリーエージェントという働き方が増えているという。自らもフリーエージェントのライターとして活躍するダニエル・ピンクは、著書の中でフリーエージェントの実態やアメリカ社会への影響、その可能性などについて詳細に述べている（ピンク（2001）池村訳)。

ピンクによると、フリーエージェントはフリーランス・臨時社員・ミニ起業家の三種類に大別される。この本では、臨時社員にまつわる問題も取り上げているが、主にはフリーランスやミニ起業家といった積極的にフリーエージェントを選んだ人々の姿を描いている。その中で、フリーエージェントの抱える問題のひとつとして取り上げられているのが「孤独」である。

フリーエージェントは基本的に独りで仕事をし、成功も失敗も自分の責任になる。何

かで行き詰まったときに気軽に話しかけられる同僚もいない。しかし、彼らはそんな孤独にひたすら耐えるのではなく、フリーエージェント同士の新しいコミュニティを作っているという。全米に様々な種類・規模のコミュニティ（ピンクはこれを「FANクラブ＝フリーエージェント・ネーション・クラブ」と呼ぶ）が存在し、フリーエージェントたちはその中で励まし合ったりビジネスに関する意見交換をしたりする。フリーエージェントの中には組織の一員として束縛されるのがいやで独立をしたという人々も多いが、他人とのつながりは自分を助けるものであり、何らかのコミュニティが必要であるという意識をもっているのだ。

同業者は商売上のライバルだが、ここではそういった競争関係よりも、同業者だからこそわかり合える気持ちがあることや、相談相手やときには仕事上の協力相手となる姿が見えてくる。このような「互恵的な利他主義」がフリーエージェントの成功の秘訣とされている。

自分独りの挑戦が他の誰かの挑戦とリンクしたとき、自分の力を高める刺激になり、連帯による安心感を得ることにもつながる。夢や目標への挑戦におけるライバルの存在は、自分の限界を超えていくために必要なものであるといえる。

３－２　目標とすべき他人

挑戦をしていく過程で重要な役割をもつ他人として、その夢や目標を達成した先人たちがいる。ＢＣリーグが作成した選手名鑑に「目標とする選手」という項目があるが、ダイヤモンドペガサスの選手26名のうち、具体的な選手名を挙げた選手が15名、理想像を掲げた選手が6名いた。インタビューの中でも憧れの選手について言及されることがあったが、そこでは有名選手の他にも高校の先輩なども目標の対象となっていた。目標とすべき人がいるということは、手探りの挑戦の中でも具体的な方向性を示してくれる意味がある。将来のビジョンに対する想像力の限界を補ってくれる。

また、目標という意味でいちばん具体的で身近に感じているのは監督やコーチのようだ。選手たちにとっては、自分たちにプロの技を教えてくれる存在である一方、ＮＰＢに行くためには必ず乗り越えなければならない壁として意識されている。特に、監督やコーチの現役時代と同じポジションの選手にとって、その存在は大きい。ＢＣリーグの方針として指導者は基本的にＮＰＢ経験者が務めることになっているが、目標とすべき世界の人間が身近にいることで、選手たちのモチベーションが刺激されるという意味があると思う。

３－３　指導してくれる他人

監督やコーチは目標であると同時に、挑戦を続ける選手たちに適切な指導をするという役回りもある。当然ではあるが、監督やコーチにしてみれば、目標にされているということの意識よりも指導者としての意識の方が強い。

秦監督は、一流のプレーヤーが必ずしも一流の指導者というわけではないという意識から、コーチングを学問として学んでいた。そして、監督やコーチは、選手たちに野球の技術だけではなく、社会人としての姿勢もこのチームで学んでほしいと考えている。純粋に野球のプレーだけから学べることも多くあるが、挑戦というたたかいの中では周りが見えなくなることもある。しかし、監督やコーチにしてみれば、その挑戦も自分独りで成り立つものではないということを選手たちに理解してほしいのだ。

また、野球を職業として収入を得ている以上、レベルの高いプレーをし、リーグ全体の理念である地域貢献も果たすべき義務がある。たとえば、安心して野球に専念できるのも裏で球団を運営しているスタッフのおかげだし、試合にはりあいが出るのは応援してくれるファンがいるからこそである。

監督やコーチは野球のスペシャリストとして、さらに社会人の先輩として、選手たちの能力開発に取り組んでいるといえる。ＮＰＢを目指すための合理的で効率的な野球指導が短期的な能力開発であるなら、地域貢献活動等を通じた社会性涵養はある程度長期的な視野に立った能力開発である[16]。選手たちがＢＣリーグ自体に所属する期間はそれほど長くないであろうが、人生全体としてみたときのキャリア形成の初期に、他人が適切に関与することによる能力開発は重要である。そのような信念のもと、ダイヤモンドペガサスの指導者たちは選手たちに向き合っている。

ダイヤモンドペガサスは群馬の県民球団であり、地域の人々によって支えられているということを実感できるいい学習の場である。支えてくれる人たちに感謝をし、実際に地域貢献活動でお返しをすることで人間的にも成長してほしい、というのが監督やコーチ、球団関係者の願いでもある。

３−４　応援してくれる他人

さらに、選手たちの挑戦に直接的な影響を与える指導者以外にも、挑戦を支える人々は多い。キャッチャーの川村選手は、ファンや親といった周りで支えてくれている人たちのために上（ＮＰＢ）に行きたい、他人の存在が自分の原動力だと語っていた。

ＢＣリーグの各球団は地域密着型球団を標榜し、試合前後の交流や地域活動への参加を積極的に行っている。これは地域活性化という本来の意味の他にも、それに参加する

---

16 玄田（2001）は、成果主義における短期的な成果の評価と長期的な能力開発の重要性を指摘する。

選手たちにもいい刺激になる。応援してくれている人たちを身近に感じる機会になるからだ。

期待してくれる人の存在の意味については、東京大学社会科学研究所のプロジェクトとして調査研究が進められている「希望学」からの指摘がある。永井暁子は、子供のころに家族から期待されていたと感じている人のほうが現在希望をもっている割合が高いことに注目し、家族からの期待と性格に関する20の項目（希望に関する調査で用いた項目）との相関を調べている（永井（2006))。その結果、「家族に子供の頃に期待されているほど、好奇心が強くなりチャレンジ精神にあふれ、小心者になりにくいし、優柔不断にもなりにくい（永井（2006）p95)」としている。

今回の群馬ダイヤモンドペガサスでのインタビューでは家族関係にまで話は及ばなかった。しかし、プロ野球選手になれるほどの能力をもっている選手たちは、幼い頃から周囲に期待されていたと考えられる。大人になったいまは、ファンという期待のかたまりに囲まれている。そのような存在が、選手たちに夢や目標といった希望を抱かせる要因になっているのは確かだと思う。

そして、そのような希望に向かって具体的に行動することを挑戦と呼ぶとしたら、周囲の期待は挑戦の糧となる。自分独りのために挑戦していると感じるのは孤独感をもたらし、ときになげやりな気持ちにもなるかもしれない。しかし、期待してくれている人々のためと思えば、前向きな姿勢を持続させることもできるにちがいない。過ぎたるはなお及ばざるがごとしというし、過度な期待は重荷になることもあるというのは言うまでもない。とはいえ、子供のころの家族からの期待はともかく、現在かけられている期待については、プロ野球というのはファンを前提に成り立っているものであり、そもそも「過度な期待」という概念などありえないともいえる。

多くのファンの期待の中で、それを励みにしつつ、ときには適度なプレッシャーを感じつつ、挑戦は続いていく。

３−５　評価してくれる他人

また、日々接している球団関係者とは別の誰かも、選手たちが真摯に挑戦する姿を見ていてくれる。たとえば、ＮＰＢのスカウト等を含めた野球関係者、マスメディアであり、また、インタビューの中で具体的に出てきたのは、球団のスポンサーや株主の企業である。

ＮＰＢに入るためには、前述のようにスカウトの目に留まらなければならない。選手たちの挑戦が報われるためには、他人からの評価が不可欠なのである。

ＢＣリーグについては、全国で大々的に取り上げられているわけではないものの、注

目されつつある取り組みであることは確かだ。日本のプロ野球は、経営面での問題や有名選手のメジャーリーグへの相次ぐ挑戦といったことから人気が落ちており、地盤沈下が懸念されている。そのような状況にあって、ＢＣリーグは野球の裾野を広げる可能性を秘めた、地域に密着した形の新たなプロ野球として評価されている。来年度から始動する関西独立リーグでは、初の女性プロ野球選手が登場すると話題になっている。今後さらにマスメディアに取り上げられ、興行的にも成功していけば認知度が高まり、それだけ選手たちのチャンスも広がることになる。

とはいえ、なかにはＮＰＢ入りが実現しない選手がでてくることも事実だ。そのような選手についても、ＢＣリーグには評価してくれる他人の存在がある。それが球団のスポンサーや株主である地元企業だ。

「仕事」に誠実に向き合う姿は、たとえその「仕事」がグラウンド上で行われるものであろうと、オフィス内で行われるものであろうと共通のものでありうる。企業の採用活動において、「ポテンシャル採用」という言葉を聞くことがある。当たり前のことではあるが、学生の時点ではどの仕事に適しているかということについて、企業の側も学生の側も明確な判断ができない。そこで学生の「ポテンシャル」を見込んで企業は採用をすることになる。

選手たちが夢や目標に向かって挑戦する姿やグラウンド上で見せる真剣なプレーは、その選手のポテンシャルの高さを感じさせる。「野球であそこまでがんばれるのだから、他の仕事にも真剣に取り組むことができるに違いない」といった思いを地元企業に抱かせることができる。そして、実際に監督をはじめ球団関係者もそのようにして選手たちを地元企業に受け入れてもらうことを望んでいる。

選手たちにしてみれば、日々のプレーが後々野球をやめたときに役立つとは意識していないだろうし、あえて意識する必要もない。彼らの目の前にあるのは毎日の練習とその延長上にあると信じているＮＰＢ入りという夢だけだ。しかし、「誰かがどこかで見ていてくれる」と漠然と感じることは、これまた漠然とした不安を和らげる効果はあるだろう。そして、目標に向かう孤独な闘いの中でも見ていてくれる人の存在は心の支えになることだろう。

他人からの評価があってこそ挑戦が報われるという例は、どの世界にもあることである。ノンフィクション作家のマイケル・ルイスは『マネー・ボール』という著書でアメリカのメジャーリーグについて書いている（ルイス（2003）中山訳）。この本には、オークランド・アスレチックスという弱小球団がビリー・ビーンというゼネラルマネージャーのもとで力をつけ、常勝球団になったという実話が描かれている。

監督としてグラウンドに立つわけでもないビリー・ビーンがなぜチームを強くするこ

とができたのか。それは、メジャーリーグで従来使われていた「大金をはたいて強い（とされる）選手をひっぱってくる」という手法ではなく、少ない資金を最大限有効活用すべく、最も効果的な選手集めをしたからだ。ビリー・ビーンが集めた選手の多くは他の球団のスカウト（自球団のスカウトでさえも）が注目しなかったり知りもしなかったりした選手たちだ。彼らは派手な長距離打者や球のスピードが速いピッチャーではないが、バッターは出塁率が高かったり、ピッチャーはアウトカウントを効率的に稼げたりする。世間の常識にとらわれて本人たち自身も自分たちがいい選手だということは自覚していなかったが、ビリー・ビーンには高く評価され、実際にメジャーリーグでも活躍することになる。

ここでいえるのは、挑戦の過程では、他者による適切な評価が行われることによって初めて報われることもあるということだ。夢や目標に向かってがんばっていても、自分だけでできることには限界もある。他者が関わることで思わぬブレーク・スルーがあり、さらに先の道が開けるといったことがある。他者に認めてもらうことが必要な場合もある。よく、「画家その人よりもその画家の才能を見いだした人間のほうがえらい」ということがあるが、適切な他者の関与ほど夢や目標の実現の近道はないのかもしれない。

しかし、誰のもとにもビリー・ビーンがやってくるわけではないし、やってきたとしてもビリー・ビーンの目に留まらないこともある。そのような幸運や実力に恵まれない場合はどうすればいいのだろう。それは、自分から積極的に周りの人々に関わっていくことである。当たり前のことだが、夢や目標に向かって挑戦しているような環境では、周りにも先人や見習うべき人々いるだろう。自分一人の力や挑戦に限界があるのなら、他人の力を貸してもらえばよい。それが効率的だし効果的だ。

とはいっても、意地やプライドがあってなかなか他人の力を借りることなどできないという人もいるだろう。野球の世界では、特にピッチャーはプライドが高い、というような話を今回のインタビューでもよく聞いた。挑戦していく中では、プライドも何もないだろう、ということもできるが、そのプライドが自分を支えている場合もあり、そう簡単ではない。そのようなときは、せめて周りの人々に対して心を開いた状態でいることが大切ではないだろうか。自分から積極的に周囲に関与していくのは難しくても、周りからの働きかけを拒むのはもったいないし愚かなことだ。心を開いてさえいれば、必要なときに必要な誰かの言葉は入ってくると思う。周囲の人々にしても、心を閉ざしている人間のことは敬遠するかもしれないが、心を開いている人間には抵抗なく関わることだができるだろう。

挑戦の過程がつらく厳しいものだと感じられれば感じられるほど、内向きになり、心を閉ざしてしまうかもしれない。しかし、そのようなときにこそ周囲に心を開けば、き

っと新しい風が吹き込み、何か違う展開が待っているに違いない。

3－6　他人についてのまとめ

不安の中で自律的に動いていかなければならない選手たちにとって、他者の存在はなくてはならないものである。切磋琢磨するライバルがいるからこそ力をつけることができるし、一緒に努力することができる。指導してくれる人がいるからこそ、適切な方向に進むことができる。応援してくれる人たちがいるからこそ、その人たちのためにがんばりたい、という思いを抱く。そして、評価してくれる人がいるからこそ、挑戦は報われる。周囲の人々とよい関係をもつことができたときが、夢や目標の実現へ近づくときだ。もしかすると「ＮＰＢ入り」という現在の夢はかなわないかもしれないが、そのときにはきっと周りの誰かが手を差し伸べてくれるだろう。

はじめから「誰かのために」「自分の周りにいてくれる人のために」力を尽くせ、ということではない。まずは自分独りの孤独な挑戦をしていくことが、自分が「こうありたい」と願うような生き方をしていくためのはじまりである。しかし、孤独な中で疲れてしまったとき、未達成の目標があるのに現状に満足してしまいそうになったとき（現状で本当に満足できるならそのままでもいいであろうが）、ふと周りを見渡してみるといいと思う。懸命に努力していた姿はきっと誰かの共感を呼び、気づかないうちに自分を応援してくれている人が出てきているだろう。その存在を認識すれば安心するだろうし、感謝の気持ちをもつことができればさらに前進していくための糧になるだろう。

挑戦するのは自分独りの行為だが、自分独りで生きているということではない。挑戦の過程では、多くの人々とかかわり合っていく。そのかかわり合いの中で自分が成長していく。そして、そのかかわり合いが自分を支えていることに気づく。そのとき、インタビューの中で多くの人が口にした「周りの人々への感謝」が生まれる。他人の存在が挑戦を支える、というのがこれまで述べてきたことだが、そもそもその他人の存在のありがたさに気づくことが、挑戦することの一つの価値なのかもしれない。

4．「生きがい感」の充足

4－1　「いきいき」の正体

私が群馬ダイヤモンドペガサスで感じた「いきいきとした感じ」、その正体は何だったのだろうか。それは、自ら望んで夢や目標に向かって挑戦する中で、生きがい感を感じている姿が発しているものだったと思う。そして、生きがい感こそ、挑戦することの大きな価値である。以下では、どのようにして生きがい感が生まれるのか、そしてそれと

挑戦との関係について考える。

４−２　野球という「生きがい」

「生きがい」という言葉を使うとき、私たちは二種類の若干異なる文脈で使っていることを意識しているだろうか。精神医学者の神谷美恵子は、ハンセン病患者と向き合った経験から、生きがいについての深い考察を残したことで知られる（神谷（1966））。神谷は「生きがい」という言葉を「生きがい」と「生きがい感」とに分けている。

前者は「野球が僕の生きがいです」という文脈で使われ、後者は「野球をしているときに生きがいを感じます」という文脈で使われる。神谷の定義では、生きがいは「生きがいの源泉、対象となるもの」を指し、生きがい感は「生きがいを感じている精神状態」を意味する。感覚的には理解できるものの、多少のわかりにくさが残る定義である。私が選手たちから感じた「いきいきとした感じ」とは生きがい感のことであり、それを生み出していたのが「挑戦」であると考えているため、生きがいと生きがい感の違いや関係を私なりに定義してみたい。

「生きがい」というのは、「生きる甲斐」がある、もしくはない、というときに使われる言葉である。「甲斐」とは「してみるだけの値打ち」のことである。つまり、神谷のいう「生きがいの源泉、対象となるもの」というのは、「生きることに価値を与えてくれるもの」と定義し直すことができる。「野球が僕の生きがいです」というときには、野球というものが自分の生に価値を与えてくれている、という意味になる。

生きることに価値を与えてくれている、と感じられるものは、そう多くはないと思う。「生きがい」という言葉を用いて表現するものは、その人の生の根本に関わるようなこと、人生の中心を占めるようなものである。たとえば、春に桜を見て美しいと思っても、それが自分の生きることに価値を与えてくれているとまでは普通は思わないだろう。しかし、神谷の関わっていたハンセン病のある患者にとっては、桜を観賞することが、それだけで生きることの価値を感じさせるものであった。また、一人の人間にとっても時期によって感じ方は異なるといえる。毎日が楽しくて仕方ないとき、美しい桜は楽しい日々にちょっとした彩りを加える程度の存在かもしれない。一方、深い悩みの中にある日々にあっては、桜を愛でるだけで心が休まり、生きているのも悪いことばかりではない、と感じることがある。

程度の差こそあれ、多くの人の前には様々な選択肢や可能性が広がっている。私たちは、その中から絶えず何かしらの選択を行っている。今日の夕飯は何にしようか、といった選択から、どちらの会社に就職しようか、といった選択まである。日々こなしている多くの比較検討のうち、就職や結婚といった、その人の人生に大きな影響を与える選

択の際、私たちは自分の人生に与える価値を慎重に吟味したうえで決断をする。高校や大学を出て、目の前に安定した仕事とこの先どうなるかわからないプロ野球選手という仕事があったとき、どちらを選ぶだろうか。おそらく、前者を選ぶ人が多いだろう。しかし、私がインタビューした彼らは後者を選んだ。彼らの人生にとっては、身分の安定や収入の安定よりも、野球をすることのほうが根本的に価値をもっていたからだ。

これまで述べてきたように、ダイヤモンドペガサスの選手たちは安定した状況にあるとはいえない。野球をする環境ひとつをとってみても、パーフェクトな条件が整ってはいない。練習は県内にある複数の球場のうち空いている球場で行い、雨天練習場があるわけではないので、雨の場合には一般のバッティングセンターを使用する。試合や練習前後のグラウンド整備は自分たちで行う。北陸のほうで試合があるときは、バスに乗って長時間かけて遠征する。

また、自分たちの能力については、プロとしてはまだまだであることを理解している。これまでの野球経験の中でも様々な成功や挫折があったが、ダイヤモンドペガサスに入って自分たちの力の不足を痛感させられた選手は多い。ＮＰＢを経験している監督やコーチのレベルともだいぶ差があり、指導されたことが実践できないもどかしさも感じている。

しかし、それでも彼らは日々プレーできることに喜びを感じている。それぞれの夢や目標を目指しながら、野球に専念できることが嬉しいのだ。野球をする環境や自分の能力が完璧ではないのは大前提だ。そもそも、プロ野球選手になりたくてもなれない人がほとんどだし、さらにその上のＮＰＢに挑戦できる場など多くはない。そのような状況の中で、やりたいことができるということが彼らにとって喜びなのだ。

職業選択という人生の岐路にあって、彼らは野球選手という仕事を選ぶほうに自分の人生の重要な一時期を賭けた。それほどに、野球は彼らに生きる価値を与えてくれるものなのだ。この選択を見ると、野球は多くの選手にとっての生きがいなのだと考えることができる。

４−３　二つの生きがい感

それでは、一方の「生きがい感」とは何だろうか。「野球が僕の生きがいです」というとき、「子供が私の生きがいです」というとき、野球も子供も、本人の行動によらず現にそこにあるものである。本人は野球や子供に思いをいたし、希望を感じることもうっとりすることもできる。しかし、実際の喜びを生むのは、「生きがい」にコミットしていくことによる。野球なり子供なりに自分が関わっていくことで、喜びを感じ、生きている価値を実感することができるのだと思う。

つまり、それだけでは静的な生きがいという対象に、自分が関わっていくことから動的な状態が生まれ、そこから得られる喜びや生の実感が「生きがい感」なのだ。私がグラウンドで見たのは、野球という生きがいに積極的に関わっている若者たちの姿であり、彼らが発する喜びや生の実感が私に「いきいきとした感じ」を覚えさせたのだ。

野球という生きがいに関わることが生きがい感を生む。しかし、彼らは、単に好きな野球をしている、というだけではない。生きがいになるほど好きな野球というフィールドで、ＮＰＢのプロ野球選手になるというさらに上の夢・目標を目指している。この「目指す」という行為、すなわち挑戦そのものが、さらに生きがい感を生むものなのである。

挑戦という行為そのものが生きがい感を生むということに関して、神谷がその著書の中で述べた以下の文章が参考になる。

「サリヴァン[17]によれば、人間の基本的な欲求は、生物学的な満足と社会学的な安定であるという。しかし、もし生きがいへの欲求が単なる社会的適応と安定を志向するものならば、ある集団の枠の中でそこの習俗や道徳にかなった生活様式をいとなみ、対人関係もうまく行けば、それだけで生きがい感がうまれるはずである。ところが事実は必ずしもそうでなく、生きがいを求めてわざわざ社会的な安定をやぶるひとさえある。たとえば周囲の反対をおしきって青雲の志に生きる青年、社会的地位をなげうって貧しい伝道者の生活にはいる信仰のひと、愛する妻子をのこし、遠い異郷へ生命を賭けての冒険に出かけるひとなど。

してみると、生きがいへの欲求というのは単なる社会的存在としての人間の欲求ではなく、個性的な自我への欲求なのであろう（神谷（1966）p52)」

そして、その「生きがいへの欲求」として、生存充実感への欲求、変化への欲求、未来性への欲求、反響への欲求、自由への欲求、自己実現への欲求、意味と価値への欲求を挙げ、それぞれについて詳述する。もちろん、この七つの欲求は例示に過ぎないし、他にも考えうるものはあるだろう。しかし、その内容を考えると、挑戦という行為がこれらの欲求を満たしうるものであり、それゆえに生きがい感を生むものであることがわかる。

「生存している」というその事実だけでは、生きていることに価値があるとは納得しにくい。自分が「こうありたい」と考えるものや「こうなりたい」と願うものが実現されることで、生きていることに価値があると思えるようになる。「こうありたい」「こう

[17] Harry Stack Sullivan（1892ー1949）アメリカの精神医学者

なりたい」というのを夢や目標であると考えると、それらのことが実現されるように動いていくことが「挑戦」である。

生きがいに対して能動的に関わっていくことで得られる生の実感や喜びが、生きがい感であった。生きがいのある人生を送るために夢や目標があるのだとしたら、それに対して能動的に関わっていく挑戦という行為も、生きがい感を生むと思う。挑戦には失敗や挫折もつきもので、純粋に楽しいことばかりではない。しかし、苦しさも生きている実感の一つである。自分にとって意味のある夢や目標に向かって挑戦することが生きている実感をもたらすのであれば、それは楽しいことや苦しいことをすべて含んだ大きな喜びになるのではないだろうか。

そのように考えると、ダイヤモンドペガサスの選手たちは、第一に、自分の生きがいともいえる野球が思い切りできることで、とにかく嬉しく楽しいという生きがい感をそれぞれに得ていた。そして、第二に、ＮＰＢに入る等の夢や目標をもっている場合には、それに向かって挑戦することで、苦しくも楽しい生きがい感を覚えていたのだと思う。彼らの多くは二重の生きがい感に包まれていたのだ。

本稿の原点には、私が群馬ダイヤモンドペガサスの選手たちに感じた悲哀とうらやましさがあった。悲哀を感じさせたものの正体は、ある意味向こう見ずな挑戦が生む不安だ。そして、一方のうらやましさを感じさせたものの正体こそ、その向こう見ずな挑戦に伴う「生きがい感」の輝きだったのだと思う。

４−４　生きがい感についてのまとめ

生きがいとは、生きることに価値を与えてくれるものである。ダイヤモンドペガサスの選手たちについていえば、将来についての考えにバリエーションはあったが、彼らの多くにとって野球が現在の生きがいといえるであるだろう。

そして、生きがい感とは、生きがいに対して関わることで生まれる喜びや生きている実感である。ＢＣリーグという場で生きがいである野球に専念することができるのは、彼らの日々に生きがい感をもたらす。さらに、生きがいのある人生を送るための夢や目標に向かって行動していくことが挑戦であり、挑戦すること自体が生きがい感を生む。

生きがいや生きがい感はごく個人的なものだ。それでも、それらを感じている人は外から見てもエネルギーを発していると思う。そのような中では、他人との交流もいきいきとしたものになる。生きがいや生きがい感は周囲にまでいい影響を及ぼすことがあるのだ。

自分が「こうなりたい」「こうありたい」と思えるような何かがあるならば、それに向かって挑戦することは生きがい感をもたらす。そこに挑戦することの価値がある。そし

て、もし、「こうなりたい」「こうありたい」と考えることが、仕事のように人生において大きな位置を占めるようなものについてであった場合、その挑戦が生む生きがい感という価値はより大きなものに感じられるだろう。

5．挑戦の結果

5－1　夢や目標の実現

挑戦することの重要な価値は生きがい感を生むことにあった。これは、挑戦の結果がどのようなものになろうとも、挑戦の過程では日々生きている値打ちを実感できるということである。しかし、そもそも挑戦とは夢や目標の実現といった何らかの結果を出すために始められたものである。結果についても考えることが、ひるがえって挑戦のもつ意味をさらに知ることにつながる。

本人にとっていちばん望ましく、自他共に正々堂々と挑戦の価値を認めることができるものが「夢や目標の実現」である。挑戦が報われることである。本人たち同様、選手たちを支えている人々は皆これを望んでいるが、夢や目標が実現した際にも忘れないでいてほしいのが「周りの人々への感謝」だという。厳しい挑戦の過程であればあるほど、挑戦が報われたときの喜びも大きい。ただし、それは自分一人だけの力で実現したことではないのだ。

現にＢＣリーグといういまの場所で野球ができるのも周りの人々のおかげであり、それはどこへ行っても変わらない。そのことを理解した上で、今度は自分たちが後に続く挑戦者たちの目標になっていく。このようにして、挑戦のサイクルは続いていくのである。

5－2　挫折経験とその意味

①完全燃焼するということ

夢や目標にかける挑戦は必ずしも報われるとは限らない。特に、プロ野球選手になりたい、といった誰もが憧れるような夢ならば、簡単にかなえられるとはいえない。ＢＣリーグの選手たちはＮＰＢという夢の一歩手前にいるとはいえ、約180人いる選手の中でＮＰＢに行けるのは年に数人である。多くの選手の挑戦は報われないのだ。

挑戦が報われなかったとき、それは挫折と感じる場合がほとんどだろう。つらいことには違いない。しかし、ＢＣリーグという場を得て思い切り挑戦できた末の挫折ならば、未来につながる経験になる。結果として思いはかなわなかったとしても、挑戦の過程で得たものは大きいからだ。本稿では生きがい感や支えてくれる他人とのつながりについ

て、挑戦がもたらす財産として述べてきた。それに加え、挑戦しきったことによる完全燃焼の経験にも大きな意味があると考える。

そもそも、インタビューをしたダイヤモンドペガサスの選手たちの中には、野球とは違う道に進んだものの、野球を続けたいという思いが強かったりＮＰＢに入るという夢をあきらめきれなかったりして、再び挑戦することにした、という選手も多い。また、ＮＰＢを経験したものの自由契約となり一度は挫折を味わったが、まだ野球を続けたいという思いからＢＣリーグに入った選手もいた。

ＮＰＢに入って一流のプロ野球選手になるという夢は、私のような一般人にとってだけではなく、多くの野球少年・少女にとっても実現可能性は高いものではない。しかし、その思いが強く、少しでも可能性が残されているのであれば、挑戦もせずにあきらめきれるものではない。あきらめることもできず心のどこかに果たせなかった夢がくすぶったまま、漫然と時が過ぎていくということは、後悔以外の何も生まないであろう。

「ここは夢を追いかける場所であり、夢をあきらめる場所」と言ったのは谷口マネージャーだが、それはつまり、ＢＣリーグはそれぞれの選手たちがそれまでの人生の大半を賭けてきた野球というものに対する思いを完全燃焼させる場である、ということなのだと思う。ＮＰＢに行けるとなればこれまでの思いは結実することになるが、あきらめなければならないということに納得するのも、人生の新しいステップに踏み出すためには必要なことである。

「自分はまだ野球ができるかもしれない、もっと上にいけたかもしれない」と思い続けていては、他の何をやっていても身が入らないであろう。しかし、人生の局面はいやがおうにも変わっていき、働いてお金を稼がなければならないし、新たな生きがいを探って豊かな人生を送ったほうが幸せである。結果はともかく、それまでの過程にピリオドを打たなければならない。挑戦することで完全燃焼すれば、納得してあきらめることができるだろう。

ＢＣリーグの選手だけでなく、プロスポーツ選手の多くは引退の際に大きな苦悩を味わう。これまでのプロスポーツ選手としてのキャリアから、次のキャリアへの移行は簡単ではない。そのことを扱った研究に、EbaughのRole Exit Theoryとそれを部分修正したDrahota&Eitzenの「The Role Exit of Professional Athletes」がある（Drahota，Eitzen（1998））。これはプロスポーツ選手が何らかの原因で引退を迎えたとき、その要因や過去の経緯によってセカンドキャリアへの移行がスムーズに進むかどうかが決まるという理論である。

プロスポーツ選手が現役生活からセカンドキャリアへと移行していく過程は、以下の四つのステージに分けられる。

- 第一ステージ：初期不安。自分がプロスポーツ選手であるということに感じる不安をさす。
- 第二ステージ：代替キャリアの模索。初期不安を経た後に、プロスポーツ選手としての生活を終えてからの次のキャリアを模索し、検討することをいう。
- 第三ステージ：分岐点。諸条件を考慮した上で引退するかどうかの決断をする時期がくることをさす。
- 第四ステージ：新たな役割の創造。プロスポーツ選手としての役割を終え、次のキャリアに移ることをさす。次のキャリアに移る際に本人の心情に影響を及ぼすものとしては、本人の未練や社会的な反応、家族等他者への影響が考えられる。

Drahotaらはアメリカのプロスポーツ（アメリカンフットボール、バスケットボール、スキー、野球）選手27名にインタビューをしている。Drahotaらがインタビューした対象には、いわゆるスーパースターも含まれれば平均的な選手やそれ以下の選手も含まれている。インタビューを行った結果から、DrahotaらはEbaughが設定した四つのステージを以下の四点において修正している。

- プレステージとして、プロ入りする前にそもそもプロスポーツ選手になることに対する不安がある場合があり、それゆえそのような場合にはステージ１が通過される。
- 競技生活を終えるきっかけが、自発的なものであるか非自発的で不本意なものであるかにより、セカンドキャリアに移行する際の心情に及ぼす影響に違いがある。
- キャリアチェンジの際には様々なことへの「あきらめ」が伴う。身体能力、経済力、感情的かつ社会的な仲間たちとのつながり、「アドレナリン・ラッシュ」といわれる高揚感、プロスポーツ選手として維持すべき緊張感など、それまで生きがいをもたらしてくれた多くのものをあきらめなければならない。
- プロスポーツ選手としてプレーしていた時代によってセカンドキャリアへの移行がうまくいくかどうかに違いがある。1950年代や1960年代においては、プロスポーツ選手としての活躍は人生においてあくまでも一時的なものであるという認識が共有されており、その後の人生設計も当然考えられていた。現在では過度な称賛や特権が与えられ、選手の感覚が麻痺し、それが永続的な状態ではないことがきちんと理解されていない。

追加点や修正点はあるものの、DrahotaらはEbaughのRole Exit Theoryが有効であると考える。Drahotaらは、プロスポーツ選手にとって競技生活を終えることは、アイデンテ

ィティの源や人々からの称賛等様々なものの変容や喪失を意味するため、とても困難なできごとであるとする。Drahotaらは、プロスポーツ選手はそれまで自分が果たしてきた「プロスポーツ選手」という役割から完全に抜けきることはできない、という。しかし、そのような過去を完全に消し去るのではなく、むしろその事実と共存することを学ぶチャレンジが肝要だ、とする。

プロスポーツ選手としても、またその後のセカンドキャリアにおいても成功しているある男性はそのインタビューの中で、「自らのプロスポーツ選手としての体験を人生のひとつの経験として希望的にとらえ、それまでプロスポーツ選手として使ってきたエネルギーを次のステップにも使えるように経験を昇華させるべきだ」と語っている。

また、プロとして現役生活を送っている間にもセカンドキャリアについて考えているほうが、突然競技生活の終焉を迎えることになっても受け入れの素地がある程度できているため、セカンドキャリアに移行しやすいという結果も出たとする。

DrahotaらはEbaughの主張を引用し、キャリアの転換期には、本人の強い意志と家族や友人等の社会的サポートが必要であるとする。また、Ebaughによると、プロスポーツ選手という役割を終え次の役割をうまく受け入れていくためには、それまでのアイデンティティを新しい役割に融合させていかなければならない。そしてその際に、本人の強い気持ちと社会的サポートが不可欠であるという。未練の問題に解決をつけるためには、プロスポーツ選手という役割を成功裡に終えるにあたって重要な「五つのチャレンジ」を挙げている。それは、①新しい役割の自分を語る言葉をもつようにすること、②社会的な反応とうまく付き合うようにすること、③他人から貼られるレッテルと折り合いをつけること、④友人関係を変えていくこと、⑤現役時代の仲間と同じように引退した仲間たちとも付き合うようにすること、である。

ＢＣリーグの選手たちがＮＰＢに行くことなく競技生活を終える際（おそらくはＮＰＢに行った後に辞める場合も)、必ず直面するのは野球への未練という壁である。未練という感情を消し去ることはできないかもしれないが、それを含め競技生活を終えなければならないという状況を受け止めることが重要だ。

今回インタビューをした選手の中では、小林選手がセカンドキャリアへの移行プロセスにあったといえる。彼は、野球を続けたいという思いと働かなければならないという思いとの間で数年間にわたって葛藤し、ダイヤモンドペガサスに入団した。そこでの挑戦の結果、野球選手としての生活に見切りをつけることを選び、セカンドキャリアへの道を進み始めた。このように、次のキャリアへ移行するまでには長い時間がかかることが予想される。しかし、悩んだ末でも「きちんと」あきらめれば、未来に向かって再び前向きになれる。小林選手の語る言葉はとても現実的でありながら力強かった。また、

彼にとっては次のステップに進むことも挑戦であり、そのことにやりがいを感じているようだった。

プロ野球選手という夢の職業への挑戦は、その夢が実現しようとしまいと、必ずどこかで終わりを迎える。そのときに、次のステップにうまく進むことができるかどうかは、それまでにキャリア移行への心構えができているかどうかによる部分が大きい。そして、実際に競技生活を終えるとき、それはあくまでも人生におけるひとつの経験の終わりであり、その後も人生は続いていくということを意識する必要があるだろう。

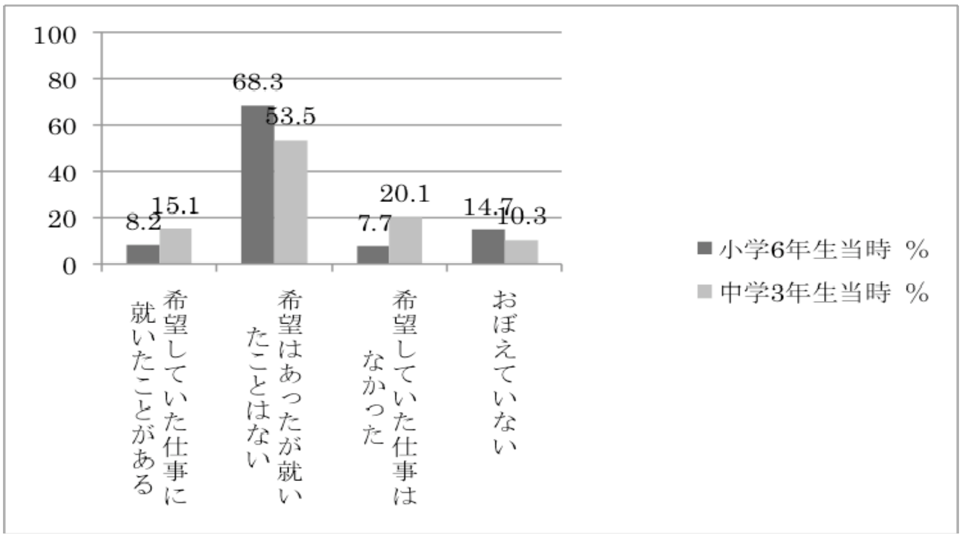
また、決して楽とはいえなかった挑戦という過程で完全燃焼できたというのは、おおいなる自信になる。様々なリスクをとり、不安と闘ってきた経験は、「ここまでがんばることができたのだから」と自分自身の支えになるはずだ。

②新たなる挑戦への準備

挑戦した結果の挫折経験は、他に何を残すだろう。東京大学社会科学研究所の希望学プロジェクトでは、挫折経験についても言及されている（玄田（2006［b］））。

希望学では、職業希望に関する調査を行っている。希望学プロジェクトの調査によると、「希望する職業があった」と回答したのは小学校6年生当時では70.9%、中学校3年生当時では62.1%となっている。その後、その実現状況を示したのが、図１である（以下、図は玄田（2006［b］）より引用)。

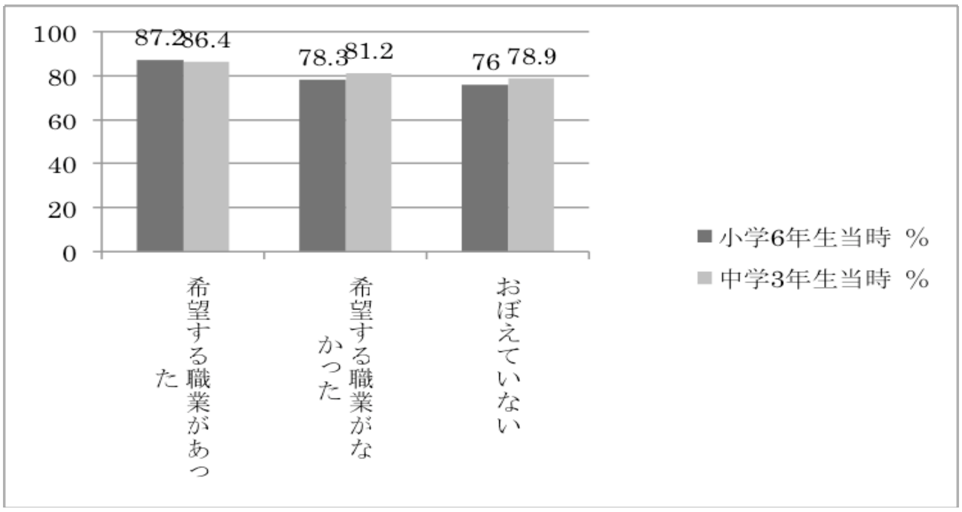
図１　小中学生時代の職業希望とその実現状況



これを見ると、希望する職業があったとしてもその多くの場合で実現はしなかったことがわかる。しかし、興味深いのは、過去の職業希望がかなわなかったとしても、実際

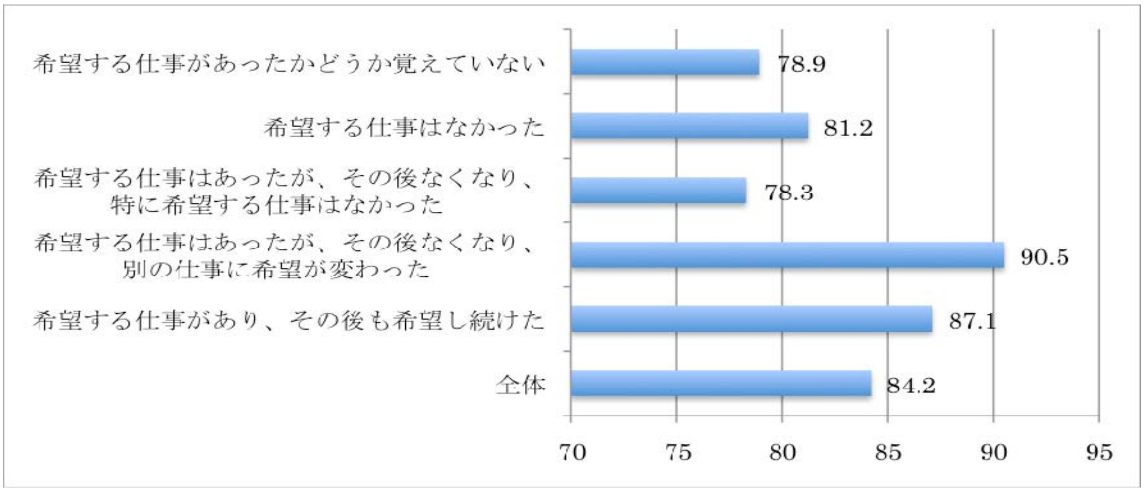
に就いた職業にやりがいを感じるか否かはまた違う問題であるということだ。それを示すのが図２である。

図２　やりがいのある仕事に就いたことのある割合



この結果によると、就いた仕事の中身によらずやりがいを感じたことのある人は多く、また、小さいころに希望する職業があった人のほうがやりがいを感じた割合が高いことがわかる。また図３は、やりがいがある仕事に就いたことのある人の割合が、中学校3年生のときに希望していた仕事があったがそれはかなわず、その後別の希望する仕事を見つけた人でいちばん高くなっていることを示す。

図３　中学3年生のときの職業希望の変遷状況別に見たやりがいがある仕事に就いたことがある割合（%）



玄田は、挫折がその人間にとってつらい経験であることを認めたうえで、「そこ（挫折経験）から始められる、そしてそこからしか始められない希望の調整や軌道修正プロセスがある。そんな挫折を経ることで、初めてわかる自分の可能性や適性がある」とする。そして、「希望は実現することだけに意味があるのではない。希望が作り出す修正や調整のプロセスにこそ意味がある。それには個人の充実だけでなく、社会全体の資源配分の効率性を高める可能性すら持っている」と続ける（玄田（2006［b］）p70-71）。

若い人は可能性に満ちている、とよくいわれる。可能性があるということは何よりも重要なことだが、一方で自分の限界を知ることも大切なことではないだろうか。可能性に満ちてはいるけれど何も試していない状態では、結局自分の志向や適性もよくわからないままだ。

仕事をしていると怒られたり失敗したり、壁にぶつかることはしょっちゅうだ。その「壁」とは、言い換えれば自分の限界のことである。自分の限界を知ったとき、はじめはショックだし悲しい。けれども限界がそこにあることがわかれば、何とかそれを乗り越えようとさらに挑戦することもできるし、違う方向に向かうこともできる。自分のどこに限界があるのかがわかってくれば、自分の志向や適性も徐々に形が見えてくる。そうすれば、効率よく自分の力を伸ばせるし、存在価値を発揮できる場を見つけることもできるだろう。

ＢＣリーグの選手たちにとって、それまで生きがいであった野球という世界で自分の限界を知ることは、本当に苦しいことだと思う。しかし、野球以外にも絶対に自分の能力が伸びる方向があるはずだ。それを探すのは、野球にすべてを賭けてきた身にとっては、結構しんどいことかもしれない。

そのようなときに助けになるのが、挑戦を全うした自信であり、挑戦の過程で支えてくれた他人とのつながりである。自分の前には道がなくとも、自分の後には道があるのだ。それを振り返れば、きっとこれから歩むべき道の手がかりを得ることもできるだろう。真剣な挑戦は、望むような結果を残せなかったとしても、先の人生につながる価値ある何かを残してくれるに違いない。

６．一般化の可能性

６−１　「挑戦すること」は特別なことか

本稿では、プロ野球選手という夢の職業への挑戦を例に、挑戦することの価値について考えてきた。挑戦というのは、大きな夢や目標に向かって行われる特別なことのように感じられるかもしれない。しかし、何も「大きな夢や目標をもつことが大切だ。そし

て、それに向かって挑戦することにこそ大きな価値がある」と言いたいわけではない。なぜなら、挑戦は私たちの日々の生活で絶えず行われているものだからだ。

確かに、これまでは若干特殊な職業分野における挑戦を見てきた。自分自身が調査している間も、これは特殊なことなのか、それとも他の職業分野にもあてはまることなのか、という疑問を常に抱いていた。そこで、群馬から東京に戻るなり、ある大企業で人事部長を務める人に話を聞きにいった。

当時は本稿のテーマも決まっておらず、プロ野球という特殊な職業と一般企業との相違を念頭におきながら幅広く話を聞いた。その企業にとっては「安全であること、安定していること」が至上命題である。挑戦とは対極にあるようにも感じられる。もちろんプロ野球の世界とは大きく違う点が多いが、それでも共通している点もあった。その一つが、挑戦に対する評価である。

具体的には、社員の評価制度の話だ。その企業は三年前に長期雇用を前提とした成果主義的な新人事賃金制度を導入した。日本の多くの企業と同じように社員の職務というものが明確に定義できるわけではないが、業務目標管理を行うべく、目標管理シートにより確認される成果をもとに社員を評価している。適正な評価をするために上長と本人が半期に二度面談を行うが、評価の対象となるのは「目標の困難度」と「目標の達成度」の二つだ。

同じ目標をたてたとしても、Aという社員にとっては達成が容易なもので、Bという社員にとっては達成が困難なものかもしれない。社員がどの程度のアウトプットを出したかということを評価するために、本人にとっての目標の困難度も評価の対象とする。つまり、社員一人ひとりの成長度が評価されるわけだ。

これはまさにその人なりの挑戦が求められるということだ。あるスキルが高い人も低い人も、それに見合った目標を立てて挑戦しなければ評価はされないのだ。企業は、努力しない社員に対して、年齢が上がっていくことだけで昇給させる余裕はなくなっている。それも一つの理由だが、社員がそれぞれの能力に見合った挑戦をすることを評価することで、社員一人ひとりの能力を伸ばし、組織全体の成長にもつなげていこうという姿勢の表れであろう。このように考えている企業は多くなってきていると思う。

もちろん、評価などされなくても別にかまわない、挑戦するといったしんどいことなどしたくない、という人もいるであろうし、それを否定するつもりはない。しかし、プロ野球選手のような特殊な世界に生きていない人の生活の中にも、挑戦は存在するのだ。本人が意識しているかどうかは別として、私たちは自らすすんで挑戦することもあるし、挑戦を強いられることもある。

挑戦は特別なものではない。そこにはこれまで見てきたような挑戦することの価値が

ひそんでいると思う。特に、周りから強いられた挑戦はしんどいが、考え方によってはそこにも価値があることに納得できれば、少しは楽になるかもしれない。

以下では、「不安、他人とのつながり、生きがい感」について、少し一般化して考えてみたい。

６−２　挑戦に伴う不安の一般化

ＢＣリーグの選手たちが挑戦の過程で抱く可能性のある不安について、本稿では詳述した。一流のプロスポーツ選手を目指している若者たちがいかに不安定で、将来が不確実か、というのは想像に難くない。しかし、挑戦に伴う不安を抱えているのはプロ野球選手という特殊な職業に就いている人々だけではない。

まず、若者にとっては学校を卒業して働くということ自体、新しい挑戦である。そして、毎日まったく同じ仕事の繰り返しというのは考えられない以上（ルーティーンワークであっても、毎日寸分違わず同じ仕事というのはありえないだろう）、働いていくということは挑戦の連続であるともいえる。それらのなかにはＢＣリーグの選手たちが抱いているものと同質の不安も多くひそんでいるのではないか。

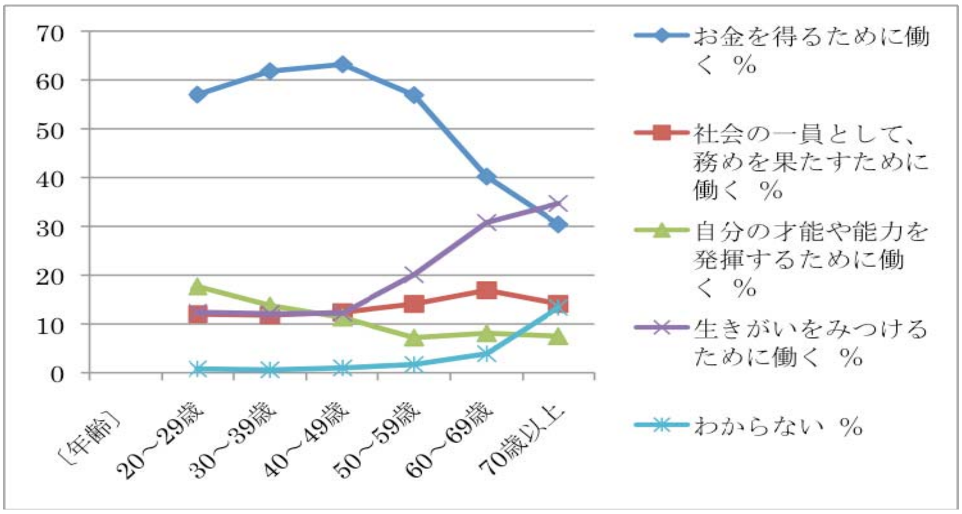
若者に限らなくても、様々な職業や働き方で、人々は大なり小なり日々挑戦をしており、不安も存在すると思う。

人々が不安に思うことは様々だろうが、以下ではＢＣリーグの選手たちが感じていた不安について、他の人々にも同様に考えることができるのかどうかを検討する。

①収入とやりがい

ＢＣリーグの選手たちは、比較的少ない収入のもとでも、好きな野球に専念できる毎日に満足を覚えているようだった。そして、収入よりもやりたいことを選ぶという傾向は一般の若者にも当てはまる部分がある。「平成 20 年版労働経済の分析」によると、働く目的について「お金を得るために働く」と回答した割合は 20 代でも最も多いと述べたが、その割合は 30ー50 代に比べると低い。図４のように、20 代では「自分の才能や能力を発揮するため」、「生きがいをみつけるため」が続くところに特徴がある。

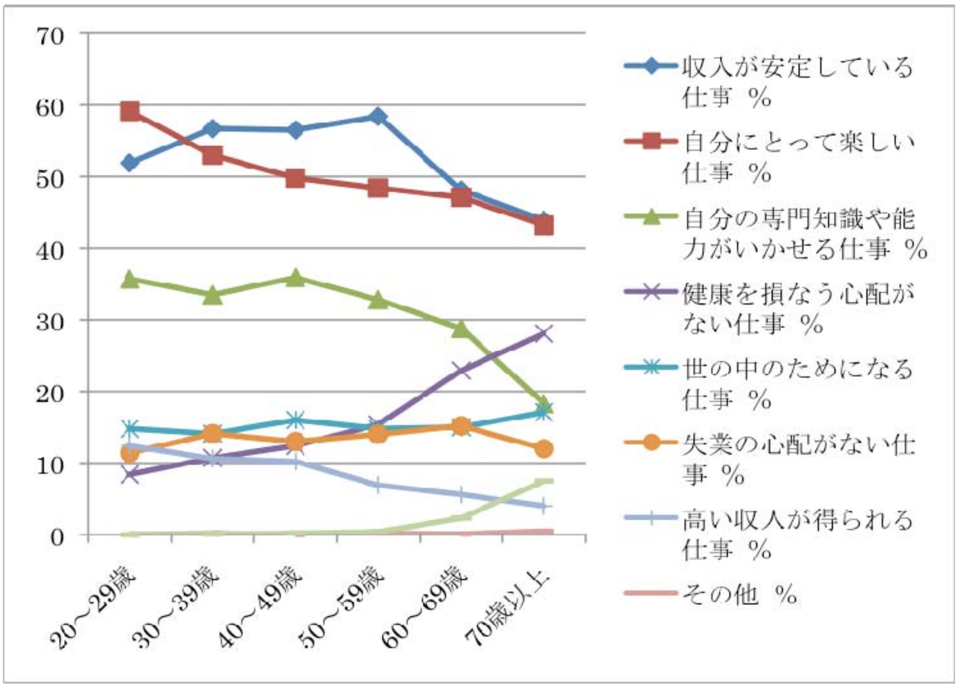
図４　働く目的について



「平成20年版労働経済の分析」より

また、同分析では理想的な仕事についての調査結果にも言及されている。図５のように、20 代では、理想的な仕事は「自分にとって楽しい仕事」であると回答する割合が他の年齢層に比べて高い。他の年齢層では、理想的な仕事の第一位は「収入が安定している仕事」となっているが、唯一二十代では異なっている。

図５　理想的な仕事とは



「平成 20 年版労働経済の分析」より

以上より、若者にあっては、働く目的はお金を得るためというのがいちばん多く、収入が安定している仕事に就くことを望んでいる人も半数以上いる一方、自分の志向に合った職業に就いて楽しみながら働きたいという人が多いのも見てとれる。生活を支える手段としての仕事を意識している人も当然多いが、他の年齢層に比べれば少ないといえる。これは、学校を卒業してすぐの若い時期は、安定した生活を望むというよりも「仕事」という未知の領域において希望をもって挑戦していきたいと考えているということの表れではないだろうか。

神谷は「生きがいを求める心に、自己の内部にひそんでいる可能性を発揮して自己というものを伸ばしたいという欲求が大きな部分を占めている（神谷（1966）p71)」と述べている。そして、生きがいを感じるためには「自由な感じ」こそがなくてはならない空気のようなものであるとするが、自由への欲求と反対の極にあるものとして安定への欲求を挙げている。特に、若いときには人は多くの可能性をもっており、その中から望ましいものを仕事という形で伸ばしていこうと思うのであれば、生活の安定よりも自由を求めることになるのだろう。

安定よりも自分の楽しみや挑戦を選ぶ人にとって、収入面での不安がないということはできない。挑戦をすることでより多くの収入を得る機会を失っている、という意見もあるだろう。しかし、事実としてはその通りであるが、それが本人にとって挑戦の代償とは必ずしも認識されないかもしれない。この場合、経済的安定と挑戦とはトレードオフであるが、本人にとっては挑戦することの価値のほうが収入面での不安を上回り、本人の満足感は結果的に高まることにつながるともいえる。生活を維持していける程度の収入があるという前提においてではあろうが、金額の多い少ないよりも、その仕事にやりがいを感じることができるかどうかが重要であるということである。

②不確実さについて

ＢＣリーグの選手たちの様々な「不確実さ」は、主に以下の三つの原因に起因していた。第一に、目標としているＮＰＢプロ野球選手という職業がごくわずかな人間にしか就くことのできないものであること。第二に、高度な身体的能力が問われるため若いうちにピークが過ぎてしまうものであること。第三に、多くの場合、選手たちは野球という一つの分野に特化した生活を長く送ってきたこと。

これらの要素は、他のキャリアを歩む人たちには当てはまらないように思える。それでは、ＢＣリーグの選手たちが抱える不安は特別なものなのだろうか。そうとも言い切れない。キャリア形成期にある若者たち全般が抱える不安についてはここですべてを検

討することはできない。しかし、不安とは一見無縁であるように思える働き方を選んだ人たちの中にも、不確実な要素が多くあることを指摘することはできる。

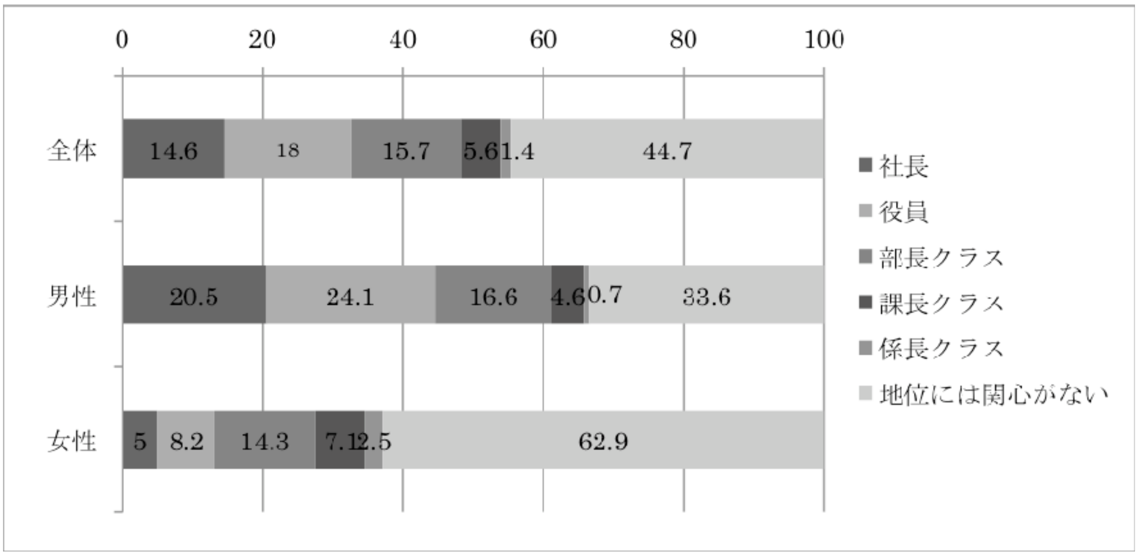
大企業や官庁に勤めてしまえば安心だという考え方は、いまやそこまで説得的ではないと思う。国際化や技術革新といった急速な変化の中で安心していられる企業などめったにないだろうし、官庁にしても世界の変化についていかなければならない。その中で働く人たちは、日々の業務ももちろんのこと、自分たちのキャリアも変化の波にさらされている。ＢＣリーグの選手たちについては、不確実性について三つの項目を挙げたが、ここでもそれに対応させて考えてみる。

・目標達成の不確実性

企業等に就職した人たちは、就職した時点でどのような夢や目標をもっているのだろう。

財団法人社会経済生産性本部がその年の新入社員を対象に毎年行っているアンケートでは、2008年に入社した新入社員のうち69.6%が「仕事を通じてかなえたい夢がある」と回答している。また、産業能率大学が同じく2008年に入社した新入社員を対象にしたアンケートでは、企業において「最終的に目標とする役職・地位は？」という質問に対して、図６のような結果となっている。

図６　最終的に目標とする役職・地位（%）



2008年度　新入社員の会社生活調査より

仕事を通じてかなえたい夢がどのようなものであるかまでは把握することができなか

ったが、企業に就職する新入社員の多くが夢なり目標なりをもっていることがわかる。しかし、「プロ野球選手になる」というのと同様、これらの夢や目標も必ずしもすべてがかなうわけではない。

「最終的に目標とする役職・地位」の実現に関連して、久保田章市は都市銀行を例にとって説明する（久保田（2007））。52～53歳ころには役員への昇進競争は結果が出ており、同期で役員になれる者は通常5～6人であるという。都市銀行ではそもそも採用する人数が数百人から千人程度であることを考えると、役員になれる確率はかなり低い。実際に、現在では役員になれなかった社員のセカンドキャリア形成支援が喫緊の課題になっているという。

一般企業に就職したとしても、夢や目標に挑戦したところで報われるかどうかは不確実なのである。しかし、学校を卒業して就職した時点ではこのことは明確に意識されない。これは、雇用という仕組みが基本的には長期的なものであることに起因すると考えられる。「最終的に目標とする役職・地位」といったものに関しては遠い先のことに感じられるため、若いうちはその実現の可否を切実な思いで考えることはあまりないだろう。また、仕事上の夢は多岐にわたると考えられるが、「(プロ野球選手になるといった夢のように）この夢がかなわなかったらキャリアを一から形成し直さなければならない」といった「一か八か」といった賭けのような要素をもったものはそう多くはないと思う。

不確実性への意識は、夢や目標をどの程度の実感をもってとらえているかにより、変わってくる。夢や目標の実現を切実に希望し、具体的な挑戦を行っていれば、それがかなうかかなわないかということに対する切迫感も強くなる。一方で、漠然とした夢や目標を抱いている状況では、その実現への期待や不安も漠然としたものになりがちである。しかし、夢の実現や目標の達成そのものは、不確実であることに変わりはない。

大学等の新規卒業予定者が行う就職活動においては、企業や官庁への就職が決まることが「ゴール」であるような錯覚を覚えることがある。本来はそこがスタートであり、その先に何を目指し、どのようなキャリアを築いていくかを考えることが大切になる。この「目指すべき何か」への挑戦には不確実性が必然的に伴う。安定していると思われがちな雇用のもとでも、どの程度意識されているかは別として、不確実な挑戦は日々続いているのである。

・契約更新の不確実性

ＢＣリーグの選手たちが「プロ野球選手」とされることの法的根拠は、個人事業主として選手が球団と結ぶ選手契約にあった。これは、試合における勝利や地域貢献活動等具体的な成果を提供する請負契約の一種である。しかし、野球選手は体力面や技術面で

安定的な成果を供給し続けることが予見しにくく、契約は単年度契約となっている。それゆえ、次年度も契約が更新されるかはきわめて不確実なことがらであるといえる。

また、体力や技術は若いうちにピークを迎えてしまい、確実に衰えていくため、プロ野球選手としての職業生活には比較的に早い時期に終焉がくることも見てきた。

一方、企業等で働き、特に期間の定めのない雇用契約を結んでいる労働者については、契約更新の不確実性はそれこそ無関係なもののように思える。日本では判例で解雇等が制限されてきたし、労働契約法でも解雇権の濫用が禁止されている[18]。とはいえ、逆にいえば客観的に合理的な理由があり、社会通念上相当であるとされれば解雇できることになる。その判断基準も相対的なものである。

解雇というような形での契約終了がそこまで現実的でないにしろ、勤めている企業等が未来永劫存続するとはいえず、いつまでも勤め続けることができるという保証はない。官庁にしても民営化された例もあり、身分の保障は絶対的なものではない。不況のたびに日本や世界の大企業が潰れ、大量の労働者が職を失う現実を見てきた人々にあっては、確実な安定雇用などないことはよくわかっているだろう。

多くの人にとっては、プロ野球選手のように職業の宿命として将来が不確実であるということはないかもしれない。しかし、それぞれの職業をとりまく世界が不確実であるため、自分たちの将来も不確実にならざるをえないのである。

・ある仕事を離れた後のことの不確実性

プロ野球選手にとっての競技生活を終えた後の不確実性は、他の職業の人々にとっては二種類の意味がある。第一の種類としては、職業生活そのものを終えた後の不確実性。第二の種類としては、職業上何らかの挑戦を終えた後のことの不確実性。

第一の意味においては、前出の久保田が指摘するようなセカンドキャリアの形成の問題となる。これはプロ野球選手のセカンドキャリア移行についての問題と同じものである。企業の定年制に関しては、定年制を廃止したり再雇用制度を設けたりするなどの改革が進められており、60歳前後の働き方は今後多様になっていくことが考えられる。いずれにせよ、若い頃と同じような働き方ができるわけでもなく、入社から退社まで単線的でまっすぐなキャリアを築くことができる状況ではなくなるだろう。

第二の意味においては、移動によって業務内容が変わる、参加していたプロジェクトが終了する、といったことが考えられる。また、自らの意思で転職した場合等も含まれる。これらについては、次に取り組むべき仕事が用意されていたり、自分で仕事を見つ

[18] 労働契約法第 16 条　解雇は、客観的に合理的な理由を欠き、社会通念上相当であると認められない場合は、その権利を濫用したものとして、無効とする。

けたりすることもできるだろうから、それほど問題はないと思われる。しかし、企業という組織自体が変革を続けているため、人々の担当する業務も大きく変化することがある。特に、技術革新や組織の合理化・効率化によって、それまで担当していた業務自体がなくなったり、大幅な配置転換が行われたりする。そのような場合には、自分のこれまでのキャリアを見直し、今後の新たな仕事の中で自らの役割を再定義しなければならない。やはり、ある組織の中で働いている間にも、自分が果たしている役割はいつどうなるかわからないという不確実性は絶えずつきまとっているのだ。

このような問題は何もいまに始まったことではないが、企業やそこで働く人々の環境変化を直視しなければならない状況になって、強く認識されることになったものであると思う。終身雇用が制度という面でも人々の意識という面でも前提のものでなくなり、転職は特別なことではなくなった。そして、一人の人間が働くときに「キャリア」というものが意識されるようになった。キャリアは、特別な技能や資格をもっている人や複数の職場を渡り歩いて経験を積んでいく人ばかりが築くものではない。毎日働いていくことがその人なりのキャリアを築いていくということであり、ひとつの企業に勤め続ける人にもキャリアはある。

企業内外の様々な変化によって、キャリアは単純なものではなくなった。働く一人ひとりにとってみれば、企業で働き続けることにしても簡単ではないのだ。企業の側としても、働く人々がやりがいをもって業務に取り組めるようにすることが組織全体のためにも不可欠であることを認識し、従業員のキャリア育成支援を行う企業も増えてきたようである。

働く人々は望むと望まざるとに関わらず、不確実性の中で自律的であることを求められている。これはとても難しいことだ。ＢＣリーグの選手たちは明確な夢や目標に向かって挑戦をすること、挑戦し続けることを自らすすんで受け入れている。たくさんの不安にくじけそうになることもあるかもしれないが、それは当たり前のこととして自分も周囲もとらえている。一方、多くの人々は不安を意識することなどないかもしれない。それでもやはり、日々の仕事の疲れとは別のしんどさを感じることもあるだろう。

ＢＣリーグの選手たちと同年代の若者にとって、これからのキャリアを自らデザインしていくことのしんどさは格別だと思う。どんな仕事をするにしても初体験の挑戦が待っている。その挑戦は、自分がその方向に進みたいから選んだ挑戦であって、自分のためであると同時に誰のせいにもできない。様々な不確実性はやはり自ら受け入れたものなのだ。また、学校に通っている間は少なくとも同年代という均質な仲間に囲まれて過ごしてきた。しかし、働きだすと多種多様な人々の中で過ごすことになることがほとんどだ。自分で自分の行き先を決めて方向を確認しながら、独りの挑戦が始まるのである。

本稿はＢＣリーグの選手たちを対象とした調査から挑戦に伴う不安について考察したが、以上のような事情から、この考察はある程度一般化できる可能性をもっていると考える。そして、不安を感じる状況は事実として存在するものの、その受け止め方によっては前向きな要素に転換していけることも同様である。不安はそれを正面から受け止めたときに、成長のきっかけにもなりうる。そのことを強調しておきたい。

６－３　他人とのつながり

ＢＣリーグの選手たちの挑戦においては、ライバルとしての他人、目標とすべき他人、指導してくれる他人、応援してくれる他人、評価してくれる他人を例に挙げ、他人の存在の重要性について考えた。企業等の組織で働く人々にとって、他人の存在はごく身近なものであり、自分の仕事も様々な他人とのつながりのなかで位置づけられている。一方、フリーエージェントのように個人で働くにしても、仕事をもたらしてくれるのは他人であり、他人の存在が大前提にあるといえる。どのような働き方にしろ、他人とのつながりは必要不可欠なものである。

また、実際に自分の仕事に関係している仲間、という意味以外にも他人のもつ意味は大きい。

社会学者のマーク・グラノヴェターは、転職におけるキャリアとネットワークの連関について、1970年代のアメリカで研究を行った（グラノヴェター（1974）渡辺訳）。転職を経験したことのある専門職、技術職、管理職の男性雇用労働者を対象に、職を見つけた際の方法について調査を行っている。職を見つけるためには三つの基本的な方法（フォーマルな方法、人的つながり、直接応募）があるが、この研究のサンプルにおいては、人的つながりが仕事を見つけるために最もよく使われた方法であることがわかった。

人的なつながりが人々と職業を結びつける際に重要であるが、その中でも、家族や親戚といったつながりより、仕事上のコンタクトが有用であるとされる。家族等自分と強く結びついている人たちに比べ、自分と弱く結びついている人々のほうが、自分がまだもっていない情報を有していることが多いことが理由といわれる。そして、それらの人々が情報を与えてくれる動機については様々な理由が考えられるが、「自分の利害関心という最小のレベルでは、自分の仕事に関係する仕事に就いて情報を与える人々は、恐らく自分が一緒に働きたい人々に情報を与えているだろう（グラノヴェター（1974）渡辺訳 p53）」とする。グラノヴェターはこの弱いつながりを「弱い紐帯＝weak ties」と呼び、個人の行動を決定する要素としては、ソーシャル・ネットワークにおける個人の位置が重要であるとする。

グラノヴェターの研究においては、他人とのゆるやかなつながりが転職においてもつ

意味が考察されているが、これは他にも応用できる概念だと思う。当然のことであるが、自分一人のもつ情報には限界があり、行動はその範囲におさまってしまう。自分と強いつながりのある他人についてもこれに近い部分がある。強いつながりのある他人とは、生活空間や交友関係が重なっているといった理由から、所持している情報が類似していると考えられる。自分に新しい情報や刺激を与えてくれる可能性が高いのは、ゆるやかにつながっている他人である。

本稿のテーマは「挑戦」であるが、挑戦とは現状を超えていくことであり、「新しさ」が要求されることも多い。その「新しさ」をもたらしてくれるのは、自分とは違う情報をもった他人である。しかし、「この人と一緒に働きたい」といった気持ちから情報を与えてくれる、という言葉のように、情報をもっていたとしても実際にそれをもたらしてくれるためには、関係が良好でなくてはならない。

他人という存在は、自分に何かをもたらしてくれるものだという認識ではなく、あくまでもその関係性は双方向のものでなければならないのだ。ピンクはフリーエージェントの仕事がうまくいくための条件として「互恵的な利他主義」を挙げているが、自分が相手に何ができるかを意識することが重要だろう。ただ、すぐに具体的な何かができるかというと、そうではない場合も多いと思われる。大切なことはその場その場での物や情報の交換ではなく、相互に利益をもたらす用意のある思いやりと信頼に基づいた関係を築くことであるといえるだろう。

群馬ダイヤモンドペガサスの選手たちも、多くの人々に支えられているという意識は強くもっており、感謝の気持ちを頻繁に口にしていた。また、実際にも野球を通じてその人々に貢献することを意識していた。これもピンクのいう「互恵的な利他主義」の一種であるといえるだろう。

6－4　生きがい感について

①将来と現在との関係

群馬ダイヤモンドペガサスの選手たちの多くは、将来の夢や目標をもち、それに向かって日々努力を続けていた。将来に対する希望をそれぞれ抱いている一方、野球が思う存分できること、試合や練習で自分の力を伸ばしていくことができること、応援してくれる人たちに囲まれていることなど、現状についても大きな生きがいを感じていた。将来の展望と現状の充実感との間には何か関係があるのだろうか。

13 歳のハローワーク公式サイト企画しごと観研究会調査が行った「高校生の“しごと観”と“進路選択”に関する調査」では、将来的な展望をもつことが現在にもプラスの影響を及ぼすという結果が出ている。これは、2007 年 12 月から 2008 年 2 月にかけて、

東京・千葉・愛知・大阪の高等学校 16 校、5956 名の高校生を対象に調査を実施された調査である。

そこでは、肯定的仕事展望・将来就きたい仕事の決定状況やキャリアイメージと意欲[19]との相関について分析を行っている。その結果、肯定的仕事展望をもっている人のほうがそうでない人よりも、また将来就きたい仕事について考えたり将来就きたい仕事を決めていたりする人のほうがそうでない人よりも、現状における意欲が高いことがわかったとされている。

この調査は高校生を対象としたものであるが、将来への考え方と現在の努力との関係を考えるにあたって示唆的である。つまり、将来に対して肯定的である程度具体的なイメージをもっているほうが、現状の中で課せられた課題に対しても前向きに取り組むことができるということがいえる。

「何のために勉強するの？」という問いは、勉強が難しくなり学ぶ分野も多岐にわたっている中学生や高校生がよく発するものである。「いい大学へ行っていい企業に入るために何となく必要だ」という漠然とした感覚を抱いていたとしても、そのようなあいまいな思いだけで日々の難しい勉強に積極的に取り組めるはずはない。将来的に役立つかどうかは関係なく身に着けておいて損はない知識もあるし、どの道に進むにしても思考の訓練をしておくことは有効である。そのようなモチベーションを生むのが将来に対する希望やビジョンであり、それなりのモチベーションを持ちながら勉強に前向きに取り組むことで、結果的に自分が鍛えられることになる。

ここから推測されることは、仕事をしていくにあたっても、その仕事が自分のキャリアに与える影響と関連付けて考えることができれば、現状のモチベーションが高まるということだ。プロ入りを目指している野球選手についていえば、将来の目標があると日々の練習にもより一層意義が出てくるということになる。練習自体は時としてつらいものであっても、将来の夢や目標のためであると考えることで、それ自体にやりがいを覚えることができるということがいえる。

しかし、現在と将来のどちらに力点を置いて考えるかは、人それぞれである。川﨑友

---

[19]意欲については、以下五つの質問を設定。

① これだけは身につけておきたいと思うような科目や勉強の内容がある

② もっと学校の勉強をがんばりたい

③ もっといろんなことを学びたい

④ 興味をもって熱中できるものがはっきりとある

⑤ いま挑戦していることがある

嗣は、どちらを重視するかという問題よりも、両者をつなげて考えることの重要性を指摘する（川崎（2007））。ここでは、現在と将来をつなげて考えることができる場合をポジティブ、切り離して考える場合をネガティブとする。そして、さらに将来を重視するのを未来志向型、現在を重視するのを現在志向型とする。

キャリアデザインという観点から、職業的目標が明確なのは、ポジティブな現在志向型の人間とポジティブな未来志向型の人間であるという。「ポジティブな未来志向の場合、職業的目標が明確であり、目標の実現に対して現実的な努力がなされている。また、ポジティブな現在志向の場合も職業的目標が明確であるが、その実現は現在の活動の結果であるととらえられており、現在が職業的目標を追求するための場としてだけではなく、現在それ自体が大切であるとみなされている（川崎（2007）p22）」とする。

たとえば、ダイヤモンドペガサスの選手たちに対するインタビューでも、「ＮＰＢに入る」という明確な目標がまずあるケースと、「いま野球をやりたいからやっている」というケースとがあった。同じフィールドで挑戦をしていてもその考え方にはバリエーションがあるのだ。挑戦をするという行為は将来に向けて行われる。しかし、大切なのは現在の努力である。努力というと義務的な印象があるが、野球選手にとっては、練習や試合での真剣なプレーをすることをさす。夢や目標の実現を目指してプレーしているにしろ、野球すること自体が目的でプレーしているにしろ、彼らは「いま」という瞬間に生きがいを感じていた。

現在を充実させるために将来のことを考えたり、将来のために現在があると考えたりすることが大切なのではない。川崎の指摘のように、現在と将来をつなげて考えることで、一瞬一瞬がより価値をもつように思えてくる。生きがい感を生むのが挑戦することの価値だと述べてきたが、挑戦するべき何かを探すのではなく、いまという瞬間を将来にわたる長い時間の中に位置づけることから始めてみたらいいような気がする。すると、向かうべき先が見えてくるかもしれないし、現在すべきことが見えてくるかもしれない。そこにそれぞれの挑戦の可能性があると思うし、実は、いましている仕事が挑戦に満ちたものに感じられるかもしれないのだ。

②自分なりの挑戦が生むそれぞれの生きがい感

ダイヤモンドペガサスの選手たちは、その多くがＮＰＢ入りをはじめとした夢や目標を抱いていた。しかし、プロ野球選手になる、というような皆が憧れるような夢や目標をもつことが正しいのではない。というよりも、人生で大切なことなどは本当に人それぞれであり、一概には決まらない。ただ、今日よりも明日、明日よりもあさって、少しずつでもよくなっていくと考えることができれば、少なくとも生きることに前向きにな

れるだろう。そのための助けになるのが将来と現在を結びつけて考えることであり、具体的な行動が挑戦することだと思う。

誰もが憧れるような夢や目標でなくても、「こうありたい」「こうなりたい」と何となく思うことはあるだろう。既述したように、これも一つの夢や目標である。そして、挑戦については「自らの現状を越えて夢や目標を達成しようと試みること」と定義した。たとえば、「誠実な人間でありたい」と考えた場合、そのような人間でいるために精神的修練を積むのも挑戦だ。「国際的に活躍する人間になりたい」といった場合に、必要な教養を養うのも挑戦だろう。

挑戦することの価値の中でも重要なのは生きがい感を生むことだった。これは、挑戦の種類や大小には左右されないことだと思う。自分なりの夢や目標に向かって少しずつでも挑戦することが、毎日に生きがい感をもたらす。小さな挑戦やささやかな生きがい感であっても、それは日々の生活にはりあいをもたらし、前向きに生きていくことができるようになるだろう。

挑戦の一般化を試みる中で、望んでいようが望んでいまいが、私たちは様々な挑戦に囲まれていることを見てきた。それは私たちを不安にさせることもある一方、挑戦に能動的に関わることによって生きがい感が生まれる可能性もある。たとえ、将来に輝かしい展望が抱けなくても、たとえ現在に満足していなくても、その中にもある挑戦を前向きにしていくことが日々いきいき過ごすためには有効だと思う。ここに、挑戦することが特別ではない、と考えることのいちばん大きな意味があるといえよう。

Ⅵ　留意点

ここまで、私が群馬ダイヤモンドペガサスの関係者に行ったインタビューをもとに、挑戦することの価値について考えてきた。それに加え、主には労働の分野における研究や調査を引用してきたが、テーマが抽象的であるがゆえに、主観的な記述が中心になってしまった。そこで、結論にいたる前に、考えられる弱点や批判を留意点として整理しておく。

・　調査の不十分さについて

聞き取り調査を行う際には、十分なインタビュー手法を身につけて臨む必要があるが、今回の調査ではそのようなトレーニングをしないまま、我流でインタビューを行った。しかも、時間も限られており、特に選手については長時間にわたって話を聞くことができなかった。そのため、本音が引き出せていない等の不足している部分がある恐れがあり、こちらから回答を誘導した可能性も否定できない。

また、ＢＣリーグや群馬ダイヤモンドペガサスが発足して間もないことによる観察期間の短さやサンプルの少なさも欠点である。ＢＣリーグが設立されたのは2007年、群馬ダイヤモンドペガサスが加入したのは2008年であり、体制はいまだに十分には整っておらず、実績も少ない。そのことにより、日本の野球界におけるＢＣリーグの位置づけや選手たちの実力等については、確定的なことがいえない状況にある。研究対象としては興味深く、今後の可能性を感じさせるものの、あくまでこれは現状評価に過ぎないといえる。

・　キャリアチェンジに伴う問題…次の一手を考えておくかどうかということ

プロスポーツ選手のキャリアチェンジに関するRole Exit Theoryには、一つの疑問が残る。厳しい勝負の世界で生き残っていかなければならないプロスポーツ選手たちが、現役の間に引退後のことを考えるというのは、勝負に欠かすことのできない緊張感を損なうことになりはしないか、というものだ。「引退しても自分にはこういう道があるから、大丈夫だ」という甘えが、競技生活に逆に悪影響を及ぼすのではないか、というものである。「背水の陣」という言葉があるが、退路を断ってこそ人は力を発揮できるという考えは根強い。

この点、鈴村裕輔は「将来に対する適切な計画をもつ選手であれば、『明日引退が訪れたとしても進むべき道が決まっている』という安心感から、かえって目の前の試合に集中でき、よりよい成果を残すことも可能なのである（鈴村（2008）ｐ２）」と指摘する。これは、スプリングフィールド大学の研究者たちの調査によっても明らかにされているという。

しかし、今回の調査ではこの点を検証することができなかった。いわゆる「保険をかけておく」のがいいのか「退路を断つ」のがいいのかは、特に転職や進学等のキャリア転換期には重要になってくる。元シンクロナイズドスイミング選手の田中ウルヴェ京は、自身

の経験からキャリアトランジションに対する準備を現役選手である間に整えておくことの重要性を訴えている（田中（2005））。このように、実際にキャリアトランジションを経験した人々による議論が今後参考になるだろう。

・　スポーツ選手であったことへの評価について

プロスポーツ選手のキャリアチェンジに関しては、それまでとは全く別のキャリアを構築するときに、スポーツ選手として培われた能力が一般企業にも評価される場合があると述べた。しかし、この点について疑問が呈されることがある。

城繁幸はその著書の中で、年功序列制度を支えてきた状況が変化してしまったにもかかわらず制度が生き残っていることで若者の可能性が潰されている、と指摘している（城（2006））。これからは不確実な時代だからこそ「自分で道を決める自由」が重要だという。盤石と思われていたような大企業でも破綻するような先の見えない世の中で、自分の志や可能性を支えにして挑戦をすることが大切なのだ。

この本の中では、企業が採用活動の際に重要視することのひとつとして「部活動」が挙げられている。体育会系出身者が企業に好まれるのは、上司の言うことに逆らわず、企業に従順で長時間労働もいとわずに働き続ける「主体性のなさ」が理由なのだという。城のいう「年功序列を尊ぶ昭和的価値観」に異議を唱えるため、多少センセーショナルな表現を使っているのだろうが、果たして本当に「体育会系」は主体性がないのか。

個人差もあるだろうし、一概にいえることではないが、若干断定的に過ぎる議論であると思う。城が指摘する主体性のなさは、体育会系の人間が厳しい上下関係の中で先輩の言うことを聞くように鍛えられてきたため、その癖がついている、という一点によるものだ。

私が今回インタビューした中では、「ピッチャーっていうのは、みんな自分のスタイルをもっていて我が強い人間が多いから、アドバイスしてもなかなか言うことを聞かないものだよ」というような話をよく聞いた。学校の部活動での上下関係においては厳しい礼儀等を要求されることもあるかもしれないが、スポーツに限らず本当に何かに打ち込んでいたなら、譲れない部分も出てくると思う。そのような姿を「主体性がない」というのには違和感を覚える。

確かに、上司や先輩の言うことを重んじ、長時間働くことができる姿は、企業の人間の目には「主体性がない」というように映るかもしれない。しかし、体育会系の人間の側にとっては主体性がないということではなく、鍛えられた結果、許容範囲が広くなっているだけなのだ。

松繁寿和によると、企業はその採用活動において、体育会系卒業生というだけの理由や猪突猛進型の気質を尊重して学生を採用しているわけではないという（松繁（(2005))。業

務遂行に必要な能力や適性を考えた結果であり、体育会系が多いと思われるならば、それはスポーツの場がそのような能力の涵養に適しているということの表れだとする。

実際にスポーツ選手を評価する企業がどのように考えているのかはわからない。企業によってもそれぞれ異なる考えをもっているだろう。しかし、群馬ダイヤモンドペガサスの地元企業が選手たちを「体育会系で鍛えられているから」という理由で採用したがろうと、日本中の企業が体育会系を好もうと、一向にかまわないと思う。厳しい世界で生き抜いてきたのなら、それを評価されることも挑戦したことの一つの価値であると考える。

・受動的な挑戦について

挑戦についての一般化を試みる際、私たちの生活のどのような局面で挑戦が行われているかを考えたところ、受動的な挑戦の問題に行き当たった。たとえば、あるプロジェクトがあったとして、ぜひ成功させたいと能動的に取り組む場合と、命じられたから仕方なく取り組む受動的な場合とがある。前者は仕事上の挑戦としてわかりやすいが、後者も挑戦を強いられているといえなくもない。また、成果主義的な評価システムのもとでは、社員は制度的に挑戦を求められているといえる。

このような受動的な挑戦をどう扱うか。プロ野球選手になりたいと挑戦している若者はリスクも自ら引き受けており、それも超えて生きがい感を感じている。だが、挑戦を強いられている人が生きがい感など感じることができるだろうか。

他人から強いられた挑戦はとてもしんどい。すでに引用したが、神谷は、生きがいを感じるには自由な感じこそなくてはならないものだという。ここで「自由」とは何かを論ずることはできない。神谷が関わったハンセン病にかかった人々、彼らは瀬戸内海の小さな島の施設に隔離されていた。手足も動かず、目も見えない人もいた。社会的にも肉体的にも自由がないにも関わらず、それでも生きがいを感じていた人たちはいた。外の世界に出ることもできない中で世の中の進歩を聞いては感銘を受け、目も見えない中で季節の移ろいを感じては生きる喜びを覚える人たちはいた。彼ら・彼女らは、精神的な自由だけは保っていたのだと思う。

率直にいって、仕事など他人から与えられたものであることのほうが多いと思う。自ら望んだわけではない挑戦の連続かもしれない。しかし、精神的な自由があれば、そこに能動的に関わることや何らかの意味を見いだすことは自由にできる。そうすれば、これまで見てきたような挑戦することの価値を感じることもできるようになるのではないだろうか。

何のために働くのか、ということは多くの人が考え、議論している問題だ。たぶん答えは人それぞれだし、一義的に決まるものではないだろう。ただ、私たちの人生の中で働くことに費やす時間は相当長い。働くという行為の中に挑戦という要素が多く含まれている

ならば、挑戦することの価値を考えることによって、働くということそのものの価値が増すこともあると思う。

以上のような意識で、挑戦することの一般化を試みた。深い問題に足を中途半端につっこんでしまった感があるが、今後の検討課題として明記しておきたいと思う。

Ⅶ　結論「挑戦することには価値がある」　―公共政策から考えた「挑戦」―

周りの誰かが「プロ野球選手になりたい」といったとき、私たちはその彼や彼女を応援できるだろうか。野球は十分にうまいが、プロになれるかどうかはわからないという若者に、何と言うだろうか。

本人にとって大切な夢や目標をかなえるための挑戦には、強い生きがい感が伴う。しかし、「プロ野球選手になりたいって？大丈夫、なんとなるよ」と応援するのには躊躇するかもしれない。なぜなら、「プロ野球選手になる」というような誰もがあこがれるようで、だからこそ実現が難しい挑戦はリスクがとても大きいことを私たちは知っているからだ。いまの社会において「プロ野球選手になる」という可能性に賭けることは、博打にしか思えないかもしれない。

では、リスクが大きいとはどういうことだろう。夢がかなわないリスク？それも当然ある。しかし、そのようなリスクは夢をもった時点で誰しもが抱えるリスクであり、夢がかなわなかったとしても、本人が乗り越えるべきものだと考えるのが普通だ（子供にはそのような思いをさせたくない、というような親等でないかぎり）。たぶん、ここでいうリスクとは、「普通」にしていたら送っていたと思われる安定した生活を手にするのが難しくなる、ということだろう。

たとえば、29 歳（ＮＰＢの選手の平均引退年齢）で野球をやめた後、その人は容易に次の仕事を見つけることができるだろうか。個人差はあるにしろ、苦労するだろう、と考えるのが一般的だと思う。そのようなことを考えると、「プロ野球選手になりたい」という彼、彼女の背中を躊躇なく押してあげることはできないかもしれない。

一方で、安定しているように思える仕事も実は挑戦の連続であるともいえ、その中にも不安な要素はひそんでいるということも見てきた。結局、どのような仕事に就くにしても、「この仕事は安定しているから、大丈夫だよ」と 100 パーセント保証することはできない。だからこそ、逆に自分たちは日々挑戦しているのだという能動的な意識をもったほうが、そこに価値を感じることができるのだと思う。

たとえ、プロ野球選手になるという大きな挑戦にしても、周りの人間が皆「リスクが大きいからやめておいたほうがいい」と止めるようになってしまったらつまらない。そのような夢（この場合、本人にとっての夢であり、野球ファンなど他人に夢を与えてくれるものという意味でもある）が見られない世の中になったら悲しいではないか。たとえば、1944 年、激化する太平洋戦争の中にあってプロ野球は活動が休止され、多くの選手たちが戦場へと送られていった。野球は多くの人にとって娯楽に過ぎないかもしれない。だが、そのような娯楽が認められない社会が、どんなに余裕がなく窮屈であるかは容易に想像される。

結局はすべての活動が停滞し、社会全体が行き詰まってしまうだろう。

大きな夢や目標に挑戦する人、もっと身近なことに挑戦をしてささやかな生きがい感を積み重ねていく人、どちらも大切だと思う。そして、どちらも受け入れられるような社会がのびやかで望ましい。夢や目標がかなおうとかなうまいと、挑戦することには価値がある、と私は信じるのだ。

そのように言うと、挑戦が実を結ばなかったときの後始末はどう考えるのだ、と批判されるだろう。公共政策学からすると、この問題を考える必要があるのかもしれない。しかし、ここで、「挑戦することには価値があるから、もし挫折したとしても何らかのセイフティネットを設けておきましょう」という政策論を安易に論ずることはできない。

それでは、挑戦するということを公共政策学という観点からどのように考えるか。挑戦するということが個人にとって価値をもち、それによってその人間がいきいき生きることができるとする。社会というのは個人が集まって成り立っているものであり、個人が活力をもっていれば、社会全体が活力をもつことにもつながるだろう。それゆえ、公共政策学という点からも、挑戦することがその人に「いきいきした感じ」をもたらすならば、挑戦には価値があるということができる。

しかし、個人の挑戦や失敗したときの救済そのものに公共政策が関わっていくことができるかというと、私は否定的である。そもそも、挑戦ということはきわめてプライベートなものであり、国などが積極的に関与することができるものではないし、するべきものでもないのである。

それでも何かひとつ、公共政策学らしいことを考えるとすれば、社会という公共的な空間が個人の挑戦を許容するようなものであってほしいと思う。

本稿で見てきたように、夢や目標がかなうかどうかを問わず、挑戦し続けたことが結果的に他人によって評価され、それが若者にとっての次のステップにつながるということはある。とはいえ、もともと挑戦とは自由なものであり、責任も本人に全面的に帰されるものである。そこで、失敗したときの責任を何らかの政策で救済するのではなく、失敗したときにも労働市場に入っていけるような流動性があるといい。そのような労働市場の流動性は、つまるところ人々の意識が、挑戦者やそれに失敗した者を受け入れる自由さをもっているかどうかによって確保されるものだと思う。

挑戦者本人たちにとっても、周りの人々や社会のサポートを得ることは大切である。夢や目標がかなわなかったとき、その結果をどのように受け入れ、次のステップへどのように移行していくかということを考える、いわば夢や目標の「冷却期間」には、他人の存在が大きな支えになるからである。キャリア形成期にある若い人たちにとって、挑戦をできる環境にあること、たとえ失敗しても上手にあきらめるプロセスを支えてくれる人々が周

りにいることは、豊かなキャリア形成につながるといえる。

ここでは「挑戦を促進するためにこのような政策を提言する」ということは難しい。しかし、公共政策から考えたときにも個人の挑戦には価値があるものといえるため、人々には他人の挑戦を認める寛容さを、社会には個人の挑戦を受け入れる自由さをもっていてほしい、と考えるのである。そして、挑戦をあきらめなければならない人間がいるときに、見守ったり励ましたり、次のステップへの移行の手助けをするようなさりげない優しさが社会にあったなら、それはとても素晴らしいことだ。

群馬ダイヤモンドペガサスには挑戦や認める寛容さや自由さ、挑戦を諦めることを見守るプロセスがあった。挑戦をする若者を支える人々や仕組みが、今後どのような展開を見せていくのか、本研究を継続的に続けることで観察したいと思う。

挑戦は人に生きがい感を与える。それが、人がその人生の大部分を費やす仕事のフィールドでの挑戦だとしたら、かける意気込みも相当なものだ。そこにはリスクが伴うし、ある人のキャリア形成期におけるものであるならば、結果次第ではその後の人生が大きく変わってしまう。しかし、結果ももちろん重要だが、挑戦することでどれだけ成長できたかが本人のその後の人生の糧になると思う。挑戦することが個人の成長や生きがいをもって生きていくことにつながるならば、社会的にもそれは財産であるだろう。そのような財産に気づくこと、すなわち個人の挑戦の価値に気づくことが社会の発展にとっても大切なのだと思う。

フリーエージェントが増えているアメリカでは、30 歳未満の労働者の 62%は他人に雇われないで働くことを望んでいるという（ピンク（2002））。一方、独立法人労働政策研究・研修機構が全国の 20 歳以上の男女を対象に実施した「就労生活に関する調査」によると、日本では望ましい職業キャリアとして独立自営キャリアを挙げる人はきわめて少ない。20 代男性で 14.4%、20 代女性では 8.5%である。しかも、調査対象者全体でみると、1999 年には 15.3%だったものがその後一貫して減り続け、2007 年には 11.7%となっている。

日本とアメリカでなぜここまで差がつくのかは本稿の検討の対象ではない。しかし、それぞれの国での人々の意識の差は、独立自営の働き方に対する社会の許容度の差の表れである。また、実際に独立自営で働いている人の数ではなく、それを望ましいとする人の数でこのような結果が出るということは、キャリアにおけるチャレンジ精神にも差があるということだ。

アメリカにしても、実際にフリーエージェントとして働いている人すべてが成功しているわけではない。ピンクの著書でも様々なフリーエージェントの姿が紹介されている。しかし、伝統的な組織で行う労働形態を望む勢力は確かに存在するものの、フリーエージェントという働き方を認める雰囲気は高まり、それを支えるインフラも続々と整備されてい

る（ピンクは、コピー店・コーヒーショップ・書店・エグゼクティブスイート・インターネット・大型オフィス用品店・私書箱センター・宅配便の翌日配送サービスの八つがフリーエージェントのインフラを構成していると述べる）。

働き方はその国の文化や歴史的伝統のうえに成り立っているもので、日本がアメリカのような「フリーエージェントネーション」になるべき、とは一概にはいえない。しかし、少なくともそのような働き方を望む人が現実にも潜在的にも存在するなら、ぜひとも挑戦しやすい雰囲気があったほうがいいのは確かだろう。

挑戦に価値をおく社会、それは自由で寛容なものとなり、私たち一人ひとりが生きやすい社会になるだろう。組織の中で働く人も独立自営で働く人もそれぞれが自分の志向に合ったスタイルでいきいきと働くことができたなら、そのような社会は活気があるものになるに違いない。

挑戦することには価値がある。私たちがお互いにそのことを認め合えたら、それぞれが「いきいきとした感じ」で毎日を送ることができるだろう。だからといって、プロ野球選手という夢の職業への挑戦が、容易に報われるようになるわけではない。むしろ挑戦者が増えて、状況は厳しくなるかもしれない。しかし、失敗したとしても新たなキャリアの可能性は開けている。

そうすれば、私が群馬の野球場で感じた悲哀感とうらやましさは少しばかり減るだろう。彼らの将来についてはもっと希望をもつことができるから、悲哀感は薄くなる。そして、私自身も自分なりに挑戦をしていきいきしているに違いなく、挑戦している彼らをうらやましいとは思わないはずだから。

Ⅷ　おわりに

…「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る」詩人・高村光太郎はこう謳います。内定式という今日この日、私たちはこの会社での日々を歩き始めました。私たちの先には何が待っているかわからない。期待もある、不安もあります。しかし、この先何かあったとき、振り返れば自分の後ろには道が出来ており、それは私たちに自信を与えてくれることでしょう。私たちは自分を信じて、そして、未来を信じて、自分なりの道を築いていくことをここに誓います。

七年前、ある企業の内定者だった私は内定式での「誓いの言葉」を述べるという役を務めた。そのときの最後の一節だ。企業で働くということがどういうものなのか、さっぱりわからなかった。学校という住み慣れた世界を離れ、未知の世界への挑戦に漠然と不安を覚えていた私は、高村光太郎の『道程』を引用することで自らを鼓舞した。

何かに挑戦するとき、それが自分の心から望んだことであったとしても、やはり不安はつきものだろう。やむにやまれぬ挑戦だったとしたらなおさらだ。

私は、プロ野球選手になるという夢にかける若者たちの姿に刺激を受け、そこから挑戦することの意味を考えた。そして、私に学びを与えてくれた彼らを応援するつもりで、挑戦することの価値を書き記してきた。ただ、挑戦途上にある自分自身を鼓舞することになったのも事実だ。

野球にかける若者たちの前にも、私を含めた皆の前にも、どのような未来が待っているのかはわからない。わからないからこそ、未来に向かって挑戦することに意義を認めることは大切だ。それが、今日、明日、あさってと前向きに生きていくことにつながるのなら。

社会に与える影響といった公共政策学的な観点をもちだすまでもないかもしれないが、皆が他人の挑戦に対して価値を認めるような寛容さをもつことができたなら、自由で生きやすい世の中になるだろう。どうすればそのような寛容さが養われるのか、人々が昔から頭を悩ませ、今後も考え続けていく課題にちがいない。しかし、せめて私自身は他人の挑戦を温かく見守っていくことを心に誓って、そして自分自身の挑戦の価値を信じて、本稿を閉じたいと思う。

＜インタビューリスト＞

本文でも言及していますが、以下の方々にインタビューという形でお話をうかがいました。

2008 年

9 月 15 日　株式会社群馬スポーツマネジメント代表取締役社長　糸井文之氏

9 月 16 日　株式会社群馬スポーツマネジメント　加藤裕美氏

9 月 17 日　群馬ダイヤモンドペガサス

秦真司氏、河野博文氏、澤井良輔氏、谷口弘典氏、

越川昌和氏、藤澤直哉氏、富岡久貴氏、小田智康氏、青木清隆氏、

小林幸将氏、廣神聖哉氏、小暮尚史氏

9 月 18 日　ボランティアスタッフ　松本亜希子氏

群馬ダイヤモンドペガサス　川村修司氏

株式会社群馬スポーツマネジメント取締役　根岸誠氏

また、ここに名前は挙げていませんが、他にも多くの球団関係者にたいへんお世話になりました。重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

＜参考文献＞

○ 書籍、雑誌等

阿部真大『搾取される若年たち　−バイク便ライダーは見た！』集英社　2006年

今野浩一郎「好きなキャリアの作り方」『キャリアデザインへの挑戦』菊地達昭編著　経営書院　2007年

神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房　初版：1966年（新装版：2004年）

川﨑友嗣「『時間的展望』からみたキャリアデザインとその支援」『キャリアデザインへの挑戦』菊地達昭編著　経営書院　2007年

久保田章市「銀行員のセカンドキャリアと能力開発」『キャリアデザインへの挑戦』菊地達昭編著　経営書院　2007年

久保田洋一、野川春夫、末永尚、重野弘三郎「プロサッカー選手のキャリアチェンジ　−役割卒業理論（Role Exit Theory）を援用して−」『順天堂大学スポーツ健康科学研究』第六号　2002年

玄田有史「希望学がめざすもの」『希望学』玄田有史編著　中央公論新社　2006年［a］

玄田有史「希望、失望、仕事のやりがい」『希望学』玄田有史編著　中央公論新社　2006年［b］

玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安　揺れる若年の現在』中央公論新社　2001年

玄田有史『14歳からの仕事道』理論社　2005年

斉藤直隆編著『プロ野球選手という生き方』アスペクト　2004年

篠田潤子「現役プロ野球選手の引退後の希望進路」日本社会心理学会第48回大会　2007年

城繁幸『若者はなぜ3年で辞めるのか？　年功序列が奪う日本の未来』光文社　2006年

鈴村裕輔「日本プロ野球界におけるセカンドキャリア形成の現状と課題」『ベースボーロジー9　野球文化学會論文集』　2008年

橘木俊詔「プロ野球と労働市場」『日本労働研究雑誌』No.537 独立法人労働政策研究・研修機構　2005年

田中ウルヴェ京「キャリアトランジション　—スポーツ選手のセカンドキャリア教育」『日本労働研究雑誌』No.537 独立法人労働政策研究・研修機構　2005年

ダニエル・ピンク　『フリーエージェント社会の到来　「雇われない生き方」は何を変えるか』池村千秋訳　ランダムハウス講談社　2002年（原著2001年）

デイヴィッド・E・ベル「同窓会」『ハーバードからの贈り物』デイジー・ウェイドマン編著　幾島幸子訳　ランダムハウス講談社　2004年（原著2004年）

永井暁子「友だちの存在と家族の期待」『希望学』玄田有史編著　中央公論新社　2006年

二宮清純、樋口美雄『日本プロ野球改造計画』　日本評論社　2005 年
野田智義、金井壽宏『リーダーシップの旅　見えないものを見る』光文社　2007 年
マイケル・ルイス『マネー・ボール』中山宥訳　ランダムハウス講談社　2004 年（原著 2003 年）
M・グラノヴェター『転職　ネットワークとキャリアの研究』渡辺深訳　ミネルヴァ書房　1998 年（原著 1974 年）
松岡宏高「プロスポーツの経営に関する研究の動向」『体育・スポーツ経営学研究』第 21 巻　2007 年
松繁寿和「体育会系の能力」『日本労働研究雑誌』No.537 独立法人労働政策研究・研修機構　2005 年
三井宏隆、篠田潤子「元プロ野球選手のキャリア再構築に伴う心理的困難度」日本社会心理学会第 45 回大会　2004 年
ロナルド・ドーア『働くということ』石塚雅彦訳　中央公論新社　2005 年（原著 2004 年）
Jo Anne TremaineDrahota&D.StanleyEitzen: The Role Exit of Professional Athletes, *Sociology of Sports Journal*, 15(3), 1998
Mark S.Granovetter:The Strength of Weak Ties *The American Journal of Sociology*, Vol.78 No.6, 1973

『ＢＣリーグ群馬ダイヤモンドペガサス公式イヤーブック 2008』
『2008　ＢＣリーグ選手名鑑』

○ 新聞
上毛新聞
上毛スポーツ
読売新聞

○ウェブサイト
アスリートプラス　JOC セカンドキャリアプロジェクトホームページ
http://www.joc-athlete.jp/interview/071128.html
群馬ダイヤモンドペガサスホームページ　http://d-pegasus.com/
13 歳のハローワーク公式サイト　http://www.13hw.com/

日本経済団体連合会ホームページ　http://www.keidanren.or.jp
日本野球機構「現役プロ野球選手『セカンドキャリア』に関するアンケート」　マーケティング情報パック 08 年 2 月号
　http://www.fgn.jp/mpac/sample/__datas__/impacter/200802_05.html
ＢＣリーグホームページ　http://www.bc-l.jp/bcl/introduce.html

謝辞

この論文は群馬ダイヤモンドペガサスの関係者の皆様との出会いが出発点であり、お世話になった皆様には本当に感謝しております。突然やってきた私を温かく迎えてくださり、多くの方からお話をうかがうことができました。また、施設の案内やお弁当の差し入れ、ときには送迎までしていただき、皆様のご厚意に甘えっぱなしでした。調査開始時は群馬ダイヤモンドペガサスというチームのことをほとんど知りませんでしたが、素晴らしい方々との出会いによって、いまではすっかりファンになっています。

群馬ダイヤモンドペガサスの皆様、どうもありがとうございました。チームとリーグ全体の発展を心から祈念しております。

そして、指導教官を引き受けていただいた東京大学社会科学研究所の玄田有史先生には、長い間ご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、心から感謝いたします。先生からお教えいただいた様々な問題は、簡単に解決するような類いのことではないと思いますが、これからも自分なりに考えていくつもりです。働くことと同様、論文作成も「苦楽しい」ものでしたが、書いてよかったと思っています。本当にありがとうございました。

また、東京大学社会科学研究所の中村圭介先生、村上あかね先生には、本論文の審査の際に重要な示唆をいただきました。貴重な助言をいただきましたことに感謝しております。

他にも、本文中にも出てくる私の以前の上司、友人や家族等多くの人に意見や励ましをもらうことができました。最後になりましたが、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

平成21年3月3日　渡部結実